

〈講演会記録〉

京都産業大学・世界問題研究所創立 50 周年記念シンポジウム

『日本の普遍性』を問う —
『見るもの』から『働くもの』へ

東郷和彦

Kyoto Sangyo University Institute for World Affairs
50th Anniversary Symposium“In Pursuit of Japan’s ‘Universality’ —
From ‘That Which Sees’ to ‘That Which Acts’”

Kazuhiko TOGO

2012 年、世界規模の思想・政治・社会・外交の混迷を見て、世界問題研究所は、「日本発の『世界』思想」を探求せんとの問題意識に立って、一連のセミナーの開催を企画した。そして、2013 年、2014 年、2015 年の春に三回連続でセミナーを開催し、ようやく京都産業大学内外の研究者 20 名の参加をえて「日本発の『世界』思想」という問題意識がおぼろげに浮かび上がってきた。

そして、今回の研究を一旦しめくくる最後の場として、この問題に真に深い造詣を持つ先達の胸を借りてもう一回議論を深めたいと考えた。

かくて、京都哲学界の重鎮であり、京都学派の業績を一身に勉強された中からいま、新たな哲学世界を切り開き、その思想を日本内のみならずドイツをはじめとする世界に向かって発信しておられる大橋良介日独文化研究所長と、『文明の海洋史観』によって日本発の文明観を内外に宣旨し、さらにこれを、『富国・有徳』の思想による哲学と実践に深め、今や静岡県知事として美の国『ふじのくに』づくりにまで高めんとしておられる川勝平太静岡県知事のお二人に、基調をなす講演を御願ひすることとなった。

お二人の快諾をえられたことは、私にとっても研究所にとっても望外の幸せであった。研究所からは、哲学の分野から森哲郎教授、公共政策から中谷真憲教授、外交から私が議論に参加しつつ、竜虎相まみえる両氏の知的バトルの激震に、忘れることのできない感銘を受けることとなった。

これまさに、大橋所長の議論が「悲」に、川勝知事の議論が「花」に収斂し、「悲」と「花」の絢爛たる相克の中から新しい日本の黎明を垣間見る、知的昇華の一時であった。

大橋、川勝両先生に、本件を企画した研究所全員に代わって深く感謝し、また、シンポジウム成功のために力を尽くされ多数の関係者に対し、感謝の気持ちを表明したい。

シンポジウム・プログラム
2016年（平成28年）3月26日（土）
於 京都産業大学・むすびわざ館

開会の挨拶 大城 光正（京都産業大学学長）
東郷 和彦（世界問題研究所長）

第一部 基調講演

「哲学に東西ありや — 日本哲学の潜在力」
大橋 良介（日独文化研究所所長）
「文明に東西ありや — 日本文明の場の力」
川勝 平太（静岡県知事）

第二部 パネル・ディスカッション

基調講演者によるディスカッション
基調講演者とパネラーによるディスカッション
会場とのディスカッション

閉会の挨拶 東郷 和彦（世界問題研究所長）

世界問題研究所創立 50 周年記念シンポジウム

「『日本の普遍性』を問う —
『見るもの』から『働くもの』へ」

平成 28 年 3 月 26 日 (土)

むすびわざ館

司会 それでは、13 時半で定刻となりましたので、これより京都産業大学世界問題研究所 50 周年記念講演、「『日本の普遍性』を問う — 『見るもの』から『働くもの』へ」を開催させていただきます。

私、総合司会を務めます世界問題研究所教員の中谷と申します。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

一番最初にアナウンス事項で大変申しわけないのですが、幾つかご案内があります。

まず 1 つ目、休憩時間が 15 時 25 分から 40 分まで予定されております。この中で質問票を回収したいと思いますので、3 人の学生たちがその 15 時 25 分から 15 時 40 分の間、フロアを回ることになっております。ですので、その間にお書きいただきまして、アンケートのほうにご協力をいただければと思います。このアンケートというのは、一番最後にフロアからの質問を受けつけるときに用いますので、何かそこでご質問をお書きいただければ大変幸いです。

2 つ目ですけれども、写真、それから録音です。いろいろ諸事情がございまして、写真撮影と録音に関しては、大変申しわけないのですが、お控えください。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、改めましてきょうのプログラムをご案内いたします。プログラムは 2 部に分かれておりまして、第 1 部、基調講演、これは大学、そして研究所のほうからのご挨拶に引き続きまして、後でまた詳しくご紹介いたしますけれども、基調講演としまして大橋良介先生、そして川勝平太静岡県知事、お 2 人にご登壇いただいて、それぞれ基調講演を賜ります。その後、休憩がありまして、さらに第 2 部がその後続きます。時間的には今のところ 15 時 40 分からの第 2 部の開始を予定しております。ここでは、お 2 人の基調講演者の対談的な討論をやっていただきまして、その後、世界問題研究所の所員も含めたパネルをやることになっております。そして、その後がフロアの皆様からの質問を受けつけて、一緒に討議をしていくという流れとなっております。長丁場になりますが、どうぞおつき合いのほどよろしく願いいたします。

それでは、早速ではございますけれども、まず最初に、京都産業大学学長、大城光正よりきょうの

開会に当たってのご挨拶を申し上げます。

大城先生、よろしくお願いたします。

開会の挨拶

京都産業大学学長 大城 光 正

大城学長 ただいま紹介にあずかりました京都産業大学学長の大城光正であります。

本日は、京都産業大学世界問題研究所設立 50 周年講演会に多くの方のご参集を願ひまして、本当にありがとうございます。

本日のテーマは、「日本の普遍性を問う」ということで、私としても非常に興味を持っております。実は私の専門は言語学でありまして、世界中には現在、約 6,000 の言語があって実際に話されております。つまり、世界には多種多様な言語が存在しており、言語的に多様性の一面を持っております。しかしながら、言語を使っている我々人間には共通の普遍的な特質も持ち合わせています。つまりこれはパソコンに例えますと、パソコン本体が我々の脳で、そこにソフト、つまりは両親が日本語を母語とする場合は日本語のソフトが頭 (= 脳) に入り、そして日本語を母語として使う日本語母語話者になるのです。しかしながら、両親が日本語母語話者であっても、その赤ちゃんが生後すぐに英語を母語とする両親のもとに預けられたら、当然その赤ちゃんは英語の母語話者になるのです。つまり我々の言語というのはパソコン本体に当たる普遍的な「脳」とその多様なソフト (= 使用言語) の 2 面的な様相が存在するわけです。ですから、いろんなソフト (= 言語) があるがゆえに、言語というのは多種多様な、今現在約 6,000 もの言語が存在しているのです。言語学者の研究テーマの中には、その本体、つまり普遍的な脳の言語構造を解明する研究分野も存在します。その研究には多種多様な言語の中から共通な特徴と各言語間の相違を明らかにしながら、人間の脳の普遍的な言語構造を解明するというものです。

そういう意味では、多様性と普遍性というのは相反するものではなくて、むしろその両方がいろんな形で有機的に機能していると言えるのです。多様性の中に普遍性を見出す。そういう意味では、私は今日のこの「日本の普遍性を問う」ということでは非常に興味を持って拝聴したいと思っております。

いろんな形で言語は我々の日常生活の中で使われています。私はその中でも特に今から 3,500 年前のトルコで話されていたヒッタイト語 (Hittite) という粘土板に楔形文字で刻まれた言語を専門にし

ています。また、私は大学3年生のときに、人類最古の民族で人類で最初に文字を創造した古代メソポタミアのシュメール民族の楔形文字言語であるシュメール語（Sumerian）も学びました。そういう古代の言語であっても、実は日本語との間に何らかの共通性があるわけです。やはりそれは人類共通の言語的なメカニズム、普遍的な言語構造や思考のメカニズムは同じではないかと感じていました。

実は、この4月2日に入学式がありまして、その時に新入生に対して言う内容を考えているところです。新入生に言いたい一つは「日本語をよく勉強してください。」ということ。それはなぜかといえますと、例えば、日本語の名詞には、文法上、英語のように-sをつけて複数形にするような形態がないと言われますが、それは間違いなんです。日本語にも部分的ではありますが、実際にはあります。例えば、「子どもら」、「子どもたち」、「おまえども」のような「ら」「たち」「ども」などです。さらに、これら以外にも複数形を表す形式が存在します。それは語と語を重複させるものです。例えば、「人」と「人」、「国」と「国」、「家」と「家」、「山」と「山」で、それぞれ「人々」、「国々」、「家々」、「山々」など。私は留学生対象の日本語教育に関する授業担当の経験もあります。留学生から、「じゃ「山々」とか言うのに、なぜ「丘々」や「川々」とは言わないのですか。」と質問されたら、皆さんはその答えにお困りにならないのでしょうか。

この説明には日本語に限らず人類共通の言語面での共通性が指摘できそうです。よく考えますと、「国々」というのは、国は1つとして同じ国はありません。人もそうです。木だってそうです。山だって同じ山は一つも存在しません。そこには、一つ一つの単体にそれぞれ固有の特徴、個性を指摘することができ、その個性を有する単体同士の複数性を表出する場合に重複形が表出されているようです。

そこにも古代人の感性があるわけです。「砂」はというと、個々の砂の単体に個性的な特徴は見出しにくいので「砂々」とは言わない。「川」はどうだというと、川だって今なら我々は上空から見ることも可能ですが、古代人が川を見る場合は、上空から見渡すことはできませんので、川のほとりで河岸を見る以外にないんですね。だから、鴨川にしても、桂川や淀川など、どこの川にしても川のほとりから川の流れる様子を見ると、そこにはそれぞれの川固有の特徴は見いだせないから、「川々」とは言わない。丘も「丘々」とは言わない。重複的な複数形で表現される名詞は複個性的とも言えるもので、個々の事物がそれぞれ類別可能な固有の特徴を有している場合に限定できるのではないかと思います。このような形式は実は日本語だけではなくて、すでに挙げましたシュメール民族の非常に古い言語でありますシュメール語（今から約5,000年前の古代メソポタミアの言語）にもあります。例えば、シュメール語 kur「国」の複数形は kur.kur のように。ですから、多様性の中にも普遍的な特徴もあるといえるのです。これは今日の哲学であろうと東西ありき、文明であろうと東西を超えた普遍性、そういう面からも興味を持って拝聴したいなと思っているところであります。

結びに、本日、この講演会が皆様にとりまして、実り多いものとなることを祈念いたしまして、開

会の挨拶とさせていただきます。本日は、本当にありがとうございました。(拍手)

開会の挨拶

世界問題研究所長 東郷和彦

司会 それでは、引き続きまして、京都産業大学世界問題研究所所長の東郷和彦よりご挨拶を申し上げます。

東郷所長 皆さん、こんにちは、世界問題研究所長の東郷和彦でございます。

京都産業大学世界問題研究所設立 50 周年、「日本の普遍性を問う」のテーマでシンポジウムを開催することができました。大橋良介日独文化研究所長、川勝平太静岡県知事、このお二人をお迎えすることができまして、きょうのシンポジウムをやることは私にとってまことに感無量でございます。

世界問題研究所はさまざまな活動をしてまいりましたけれども、恐らく私たちにとっての最も大切な課題は、今の日本、そして今の世界にとって最も大事な世界問題とは何か、その本質を極めたいということではないかと思えます。私が専門としてやってまいりました国際政治という観点からただいま現在の日本を取り巻く東アジアにおける最も大事な問題は何かと申しますと、私は恐らくは台頭する中国の問題ではないかと思っております。もちろん東アジアにおきましては北朝鮮の問題がございます。けれども、北朝鮮の問題というのは、ある意味で金王朝という余りにも特殊であり、余りにも変わった問題であり、この問題は何らかの時点で、いつかの時点で破綻し、乗りかえられていくことではないかなと思えます。それから最近の問題では、もちろんイスラムのテロの問題がございます。しかし、この東アジア世界に関して言えば、このイスラムのテロの問題が最大の焦点になっているという状況では少なくとも今はないように思えます。それから、科学技術の発展によるサイバー、宇宙、こういう全く新しい問題がこの世界の安全保障の問題を根本的に変えつつあります。しかし、これらの問題はまさにただいま現在起きており、これからの問題として本当に真剣に考えていかななくてはならないことかなと思えます。

さて、中国の台頭という問題は、少なくとも 30 年前から中国の経済、政治、そしてただいま現在では軍事というところに焦点が当たってきている喫緊の課題でございます。申し上げるまでもなく、海軍力を中心として東シナ海、南シナ海、それからさっき申し上げました新しい技術に関連する宇宙、それからサイバー、そういう問題について中国の台頭が惹起している緊張関係というのは大変なものがございます。

これを迎える主な勢力はどこにあるかと申しますと、これは言うまでもなく冷戦後世界最強の国家となったアメリカでありまして、中国を新たな覇権国家としては認めない。そのために南シナ海での航行作戦をとってきているわけでありまして。これはまさに東の中国、西の米国が力によって対決してくる、そういう国際政治の分野で言うならばリアリズムの力の激突というのが起きているのではないかとと思われるゆえんであります。しかしながら、ただいま起きている中国とアメリカとの関係は力の対決という観点だけで理解できるでしょうか。できないと思います。それはなぜかといいますと、この力の対立の本質が経済、政治、軍事を超える文化、文明の対立になってきているのではないかと思うからであります。中国は申し上げるまでもなくかつて19世紀半ば以前の東アジアに独自の価値、世界観、統治の機構というものをもって中華の世界というのをつくってまいりました。今、中国はこの歴史に根ざした、しかし新しい中華文明を世界規模でつくろうという動きに出てきております。2013年3月の全国人民代表大会会議で、習近平主席が中華国家の偉大な復興という中国人民の夢を実現すると声明し、2014年5月には上海で開催されたアジア相互協力信頼醸成会議で、アジアの安全はアジア人の手で実現しなければいけないと述べた、このような思想は、まさにそういう新しい中華というものをこれからつくっていこうという発信ではないかと受けとめております。

さて、これを迎えるアメリカはどうかと申しますと、申し上げるまでもなくアメリカは、ギリシャ、ローマに発し、キリスト教世界を経て、市民革命、産業革命を経て、世界を席卷してまいりました欧州発の文明、これを現代において体現している国家であります。国際政治の力学上の対立を超える文明の対立、対峙、もしくは激突が起きているのではないのでしょうか。

さて、皆様、ここで私たち日本に対して突きつけられている最も大事な問題があると思います。それはこの米中激突する対立の中において、日本の立ち位置はどこにあるかという問題でございます。この問題を国際政治という観点で日本政府に聞けば、答えは非常に明らかな。かつての私の同僚の外務省の人たちに聞けば、それは議論する余地もない。日本はこういう状況の中で、まず日本の防衛力を強める、そして日米同盟というものをしっかりやっていく以外にないではないか。むしろそれと違った考え方を言うということは危険思想であると言われかねないような、そういうムードが日本の中にあると思います。民主主義、平和ということを基調として考えてきた私たちにとっても、日米同盟をしっかりとやっていこうという考え方は矛盾するものではないように思います。しかし、それではそのような考え方だけで今の世界に対する完全な答えがでるのでしょうか。私はそうは思いません。中国が新しい中華という新しい文明思想を彼らなりに必死になって考えている今の状況で、どうしても今の日本として考えておかななくてはいけないのは、日本発の世界思想というのはあるのかなのか、あるとすれば一体何かということだと思います。

では、どういうふうにしたら日本発の世界思想を生み出せるのか。過去3年間、私どもの研究所では必死になってそのことを考えてまいりました。第1に、外交政策。長期的かつ戦略的な外交政策と

いうものが出てこなくてはいけないとは思っております。しかし、その外交政策を生み出す根底には日本としての国づくりの思想、どういう日本をつくるか、そのための公共政策がどういうものであるかということを考えねばならないと思います。そして最も大事な点だと思えますけれども、そういう国際的、国内的な現実の政策の実施というのは、その根底においてそれを支える根本思想、すなわち哲学が不可欠ではないかと思っております。比喩的に申し上げれば、哲学、そしてその哲学と一緒に考える文明論を根とし、国家目標、公共政策を幹とし、そして対外政策、国際関係への日本の発信を枝とする。そういう根と幹と枝を総合するような、そういう勉強をしなくてはいけないということを考えてまいりました。

2013年の春に、そういう意味で京都学派、西田幾多郎の哲学を中心とする第1回のセミナーを開催いたしました。2014年の春にアジアの思想、儒教、朱子学、新しい孔子の解釈、そういう点を中心とするセミナーを開催いたしました。そして2015年の3月、今のような思想と公共、外交政策とがどういう関係にあるかということについての第3回のセミナーを開催いたしました。その結果、哲学、公共、国際政治、この3つの分野での京都産業大学の先生と産業大学以外の先生、外国人と日本人を取り混ぜまして20人の先生方にお集まりいただきまして、それぞれに論文を書いていただき、間もなくそれを本として出版していきたいというところに来ております。

さて、結論でございます。きょうのシンポジウムは、私たちがこれまでやってきた勉強の最後の機会に、もう一度両巨頭をここにお迎えして、この問題について根本から議論をしていただきたいという趣旨でございます。その意味で、哲学の大橋先生、それから文明論をつくられ、それをただいま現在、静岡県で実施しておられる川勝先生、このお二人を迎えて議論できるというのは、本当に私の無上の喜びでございます。

一つだけ故人に遡りますけれども、世界問題研究所の所長として長く本学に様々貢献をしてくださった方に若泉敬という先生がおられます。若泉先生は申し上げるまでもなく1969年、沖縄の返還に関して佐藤総理の密使として、核兵器の除去の問題についての秘密合意をされた方でございます。その翌年の1970年、若泉先生は当時の世界の思想家であるトインビーに会いにロンドンに行かれて、3日間の間、徹底した討論をしておられます。そのときに若泉先生が出された質問がございます。「今日の世界では、資本主義と共産主義のようなイデオロギーの対立、ヒンズー教と回教のような宗教上の激突、さらに広い意味での東西文明の相違という現象が依然として存在していますが、そうした中で、人間の生命の尊厳を原点とする普遍的真理についての東洋と西洋の対話、そして究極的には東西の文明の融合、統一はどのようにして可能でしょうか。可能とした場合、最も基本的な理念と価値基準は、そこに求めるべきでしょうか」(トインビー・若泉敬『未来を生きる：トインビーとの対話』講談社文庫1977年83ページ)という質問です。1970年、今から46年前の若泉先生のトインビーに対する問いかけでございます。哲学に東西ありや、文明に東西ありや。先ほどの国際政治の問題か

ら言うと、そこに今、激突のシナリオしか見えません。しかし、それを哲学という視点から、それから文明論という視点から乗り越え、世界を融合、統合していく方策はあるのだろうか。その鍵は、日本の普遍性の中にあるのだろうか。46年前の若泉先生の問いを受けて、まさにそのことを、私たちはきょうのシンポジウムで問いかけたいと思います。

2016年3月26日、ようやく桜がいま咲き始めた今日、必ずやご出席の皆様がきょう来てよかった、何か得る点があったというようなシンポジウムを開催できると確信するものであります。

皆様、きょうは本当にありがとうございました。私の挨拶といたします。(拍手)

第一部 基調講演

司会 それでは、これより基調講演に入ってまいりたいと思います。

まず、最初にご登壇いただきますのは大橋良介先生でございます。

先生は、1969年に京都大学をご卒業になった後、73年にミュンヘン大学哲学部で哲学博士号を取得されまして、その後、ドイツ大学の教授資格をとられました。日本でこれは初めての資格であったということでございます。その後、日本では京都工芸繊維大学、大阪大学、龍谷大学等の教授を歴任されました。ヨーロッパではケルン大学、ウィーン大学、チュービンゲン大学等の客員教授を経て、2014年より現職で日独文化研究所の所長を務めていらっしゃいます。ご著書としまして、お手元のチラシのほうの後ろにも書いてあります、『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』、あるいは『京都学派と日本海軍』など、たくさん出されています。この『京都学派と日本海軍』はPHP新書にもなっているので、またごらんいただければと思います。

それでは、大橋先生、どうぞよろしく願いいたします。

基調講演

「哲学に東西ありや ― 日本哲学の潜在力」

日独文化研究所所長 大橋良介

Are there an East and a West in Philosophy? — The Potential Power of Japanese Philosophy

Dr. Ryosuke OHASHI
Director of the Japanisch-Deutsches Kulturinstitut

大橋でございます。ただいま詳細なご紹介をいただき、ありがとうございます。主催者から略歴をよこせと言われましたのでいろいろ略歴を記したわけでございますけれども、皆さんの中には「何か横文字が多いな。最近、ハーバード大学とかを詐称した人が話題になったようだけど、…」などと思われた方がいられたでしょうか（笑）。

経歴詐称という問題がニュースで取り上げられたとき、いろんなコメントが出てきましたですね。私のはあのように、経歴詐称というのは哲学的ないし実存的な、場合によっては宗教的な問題にもなるなと、思いました。経歴というのは、自分を語るということですが、日本語で「かたる」と言うときは、「騙る」をも意味します。経歴を語るというとき、意図せずして「騙り」が混じることもあります。たとえば私は大橋ですが、ミュンヘン大学とかケルン大学とかで何々しましたと語るとします。それは嘘ではありません。ただ、そういった「語り」はすべて外面的なことばかりです。私自身を語り出すわけではありません。だから経歴詐称でなくても、自己紹介によって自分を覆い隠す、といった意味が出てくることもあると、思うわけです。

もう少し脱線をつづけるなら、経歴詐称がバレた人について、周囲が「あの人はそういえばどこか怪しげな感じがする人だった」とコメントします。そうでなくても、誠実に自分を語ろうとすればするほど、自分から遠ざかる、ということもあります。我々の「顔」も、そういう意味で、示すと同時に隠す、という本性があります。我々の顔は我々の本性を示しているかといえば、しばしば逆の場合があります。顔は一種の「仮面」でもあります。もう十年ほど前、「仮面」(マスク)というテーマの、ある国際シンポジウムに参加したことがあります。仮面には、自分ではない超人間的な、神的な存在をあらわす意味のものも、あります。仮面をかぶることによって、自分の背後の超越的な、超自然的な力を顕示する。他にもいろいろの仕方での顕示と隠蔽という二義性が、仮面にはあります。

では、外面的な経歴を言ってもだめ、戸籍上の名前を言ってもだめ、自分の素顔を見せてもだめ、となったときに、本当の自分を示す道は、あるでしょうか。そこまで考えていくと、経歴詐称(隠蔽)という問題も、実存的、宗教的な問題につながるわけです。

皆様ご存じの話ですが、ソクラテスがアテネの神殿で神託を得て、「グノーティ・サウトン」という課題を、もらいました。自己を知るということは、西洋でも東洋でも、大問題です。『旧約』の「モーセ書」で、モーセが神に、「あなたはどのような神ですか」と尋ねる。そうすると、神は「私は私であるところのものである」という答えます。この答えはヘブライ語までさかのぼると、実はいろんなバリエーションがあり、訳もいろいろあります。しかしそれには立ち入らないとして、とにかく「私は私であるところのものである」という答えは、意味深いという気がします。論理的に言えば中身について何も言わない同語反復の答えですが、同語反復の「同一なもの」が、問題になります。これは本日の「見るものから働くものへ」というテーマに結びつくので、もう少し脱線話をつづけてください。

この同語反復は、一般的な問いに広げて考えることが出来ます。「あなたの手に持っているのは何ですか」と問われて、「これはコップです」と答えるとします。「じゃあ、コップって、何ですか」とさらに問うと、しまいには「本質」の問題となっていく、最後には「存在とは何か」といった問題にもなっていくます。

コップの問題だけなら、どうでも良いですが、「グノーティ・サウトン」にもどると、自分の本質、本性は何か、ということになります。話をふくらませる意味で、旧約の「ヨブ記」をも引用しますと、ヨブは信仰の厚い人でしたが、悪魔が彼を試します。もし悪魔がヨブを苦しめて、ヨブが神を疑い呪うなら、悪魔が神に勝利する、ということになります。しかしヨブは、ずっと苦しめられながらも、神を疑わなかった。そのヨブを神が讃えて、自分の威光を改めて宣べて、こう言います。「私が大地を据えたとき、お前はどこにいたか。知っていたと言うのなら、理解していることを言ってみよ」。

今日は静岡の臨済寺の老師様がいらっしゃるから、禅のことなど言う三十棒を食らうかもしれませんが、禅のほうの方でも「父母が生まれる以前の本来の面目（本性）は、何か」と問います。『旧約』での神の問いと、東洋の禅の根本の問いとのあいだには、「東西なし」というような通底性があるわけです。

もうひとつ、道元の『正法眼蔵』の「仏性」という巻に引用される話があります。嶺南の田舎からやってきた恵能、後の六祖となる人が、五祖弘忍に弟子入りを願う場面です。五祖は、「嶺南人に仏性は無い。そういう人（田舎者）が、どうして作仏（仏になる）などと言うのか」と言います。この個所を、田舎者に対する差別発言と非難する外国の人がいると聞きましたが、五祖は本質的なことを語っています。六祖はその意味を汲み取り、こう応じました。「人に南北ありとも、仏性に南北なし」と。弟子入りする人が師匠に向かって、こんな応答が出来るということ自体が、恵能の大変な素質を示しています。

本日のテーマとの連関で、私はこの六祖の言葉をひっくり返して受け取ってみたい、という気持ちがあります。すなわち、「仏性には南北はないが、人には南北がある」です。

学長先生のお話にあった、多様性と普遍性の問題にも、つながります。地球上の言語は6,000種類あるというお話でした。どれも言語ですから、その点では東西なし、言語という普遍的なもの、言うことが出来ます。しかし現実には種々さまざまな言語があります。普遍性というときは南北はないけれど、個物性というレベルでは南北という違いはあります。

前置きが長くなりましたが、ここから西田幾多郎の話へ、入ります。本日のテーマを、皆さんは、どう受けとめていられるでしょうか。「見るものから働くものへ」というタイトルになっていますね。これは西田幾多郎さんの「働くものから見るものへ」という言葉を、ひっくり返したものです。ひっくり返されたのは、川勝知事さん及び主催者の森先生だろうと思いますが、大変おもしろいです。仏性に南北はないが、人に南北はある、というひっくり返しも、このテーマとの関係からです。西田幾多郎の言う「働くものから見るものへ」というときの「見るもの」とは、簡単に言えば、自己そのもののことです。それには南北はありません。しかしこの自己が「働くもの」となるときは、その働き場所は都度の現実世界の中であり、したがって南北があります。

西田幾多郎のお弟子で久松真一という人がいました。禅のほうで徹底した経験を持つ方でした。こ

の久松さんがよく用いた、「台風の眼」の比喩があります。猛然と台風が吹くとき、中心の目は動かない。台風の眼には東も西もない、そのような「眼」となれ、という意味の比喩です。台風の眼は、西田の「見るもの」に該当します。その眼を蔵して、「働くもの」が立ち現われます。別に台風のような猛然たる働きでなくても、良いのです。ごく日常の行為でも、構いません。後期の西田哲学の言葉で言いますと、行為的直観です。どんな行為も、そのなかに行為を見ているものがある、直観の眼がある、ということです。古い言葉で言えば、「動中の静」です。

これは、もっと広げて受け取ることができます。カントという哲学者が、「哲学すること」と「哲学」とを分けて「哲学すること」は教えられるが、「哲学」は教えられないと、言いました。Aさん、Bさん、それぞれが、気根に応じて哲学します。しかし「哲学」そのものは、Aさん、Bさん、それぞれが自分の中にもともと持っているアイデアのようなもので、それを外から教えることはできません。ちょうど、美しいものを見るときに、われわれは、これこれが美しいと、誰からも教わることなしに感じ取ります。それは、われわれが最初から心のなかに美のアイデアを持っているからだということです。

われわれは同じ人間として、本性を共有し、その本性を、西田の言う「見るもの」と取ることが出来ます。しかし実際に世界のなかで、人間として生きて「働くもの」となるときは、私と他人、私と世界、という区別が必須となります。西田幾多郎の歌に、「人は人、我は我なり、とにかくに我行く道を我は行くなり」が、ありますが、その我は種々の「汝」と向きあっています。そして我と汝は、互いに勝手に生きて行くわけではなく、関係しあいます。だから西田は「私と汝」という論文を書いています。中期の西田哲学の道標となる論文です。

芭蕉の俳句も、参照しましょう。芭蕉は、「この道や行く人なしに秋の暮れ」と詠みました。西田の「人は人、我は我なり」とおなじです。しかしこの芭蕉の句には、もうひとつ別のバージョンがありました。「人声やこの道帰る秋の暮れ」です。「人声や」と言うからには、誰かがいる、ということで、「行く人なし」と、矛盾します。「一体、どっちが本当やねん」と芭蕉先生に聞いてみたい気がしますが、たぶん、「どっちも本当じゃよ」という返事が、もどってくるような気がします。

本筋のテーマへの助走は、このくらいにしておきましょう。図版を見てください。京都の「哲学の道」です。先ほどの西田幾多郎の歌は、銀閣寺参道の入り口から南に逸れる「哲学の道」の歌碑に、刻まれています。「哲学の道」という名前の散策路は、ドイツのハイデルベルクのものがあるのですが、テュービンゲンやカッセルやヒルデスハイムにもあります。スイスにもあります。この名称（Philosophenweg）は、正確に訳すと「哲学者の道」となりますが、まあ「哲学の道」としても良いでしょう。

一昨年のドイツ哲学会で、どういう風の吹き回しか、私は4日目の基調講演を依頼されました。日本哲学会は1年に1回ですが、ドイツ哲学会は3年に1度です。日本人として話をするわけですので、

「哲学に東西ありや？」という題で話をしました。カントと共に言うなら、「哲学の道」そのものには、東西はありません。しかしながら、日本とドイツとでは、「哲学の道」は、それぞれ風土と伝統と環境を異にし、異なった風景を提示します。現に西田哲学とカント哲学では、大きく性格が異なっています。ハイデッガーという哲学者は、東アジアとの対話を非常に重視しました。西洋哲学が行き詰まりになっていると、彼は感じましたが、それだけに、東アジアとの対話に一つの可能性を見ようとしていたのです。ハイデッガーがそのように語ったのは、もう60年前のことで、京都産業大学ができたころです。日本とドイツの哲学交流はこの60年のあいだに、ずいぶん盛んになりました。ドイツ哲学会が日本人を基調講演に呼ぶという現象も、そういった状況変化と無関係ではないと思われます。

もうちょっと考察をつづけます。

図版を見てください。この絵を描いた人は、ドイツのある哲学のプロフェッサーのお嬢さんで、日本の漫画からいろいろ学び、ドイツで漫画の賞を取りました。本も売れている人です。その人に、和室と洋間を描いてくれと頼みました。和室と洋間は、日本の家屋では、大抵は併存しています。両方のあいだに襖があって、和と洋との間を行ったり来たりすることが出来ます。これは日本の明治以降の住宅建築の一つの特徴です。和室と洋間の「と」が、この中間の襖あるいは障子に、該当します。縦向きの矢印が、障子か襖とかを開けたり閉めたりする動きを示します。そして横の矢印が、行ったり来たりする方向を示します。これは日本が外来文化を受け入れてきたときの根本構図にもなっていると、私は思っています。

戦前にカール・レーヴィットというドイツ人教授が、東北大学で何年か学生を教えました。そのレーヴィットが、日本の哲学科の学生の批判をしました。「この連中は、2階ではハイデッガーからプラトンまでの著書を並べているが、1階では依然として日本風の生活をしている。しかし1階と2階をつなぐ階段がない」と。これは非常に辛辣な批判です。当たらないでもないですが、ただし私からすると、レーヴィットの側にも問題があります。彼は「教師」として日本に来たという意識を、非常に強く持つ人でした。現在でも、ドイツから哲学の先生たちが日本に招かれてやって来るとき、2種類あります。ひとつは、哲学の先進国から来て、未開の日本人研究者にいろいろ教えてあげる、という教師意識の人です。もうひとつは、日本には何かヨーロッパと違うものがあるから、それを吸収してみよう」という人。レーヴィットは典型的な前者です。後者の典型は、おなじくドイツから東北大学に何年か滞在した、オイゲン・ヘリゲルです。この人は新カント学派の哲学者でした。彼は帰国後に『弓と禅』という本を出し、これがロングセラーとして、いまでも版を重ねています。ヘリゲルは6年かかって弓道を会得しました。最近、日本ではヘリゲル・バッシングとも言うべき現象があって、ヘリゲルが弓と禅を無媒介に一緒にしてしまったとか、ヘリゲルの言う禅は鈴木大拙の受け売りだとか、自分の弓の師匠を神秘化したとかという議論です。しかしヘリゲルが弓道の5段を得たとい

うこと自体は、ごまかしでは出来ないことです。そして哲学者として、彼が弓について考察する内容は、描写力も分析力も見事で、日本の弓道の人がこういう著書を書くということは、まず無いでしょう。それはヘリゲル・バッシングをする論者たちの、知的にシャープではあるが、どこか斜交いにも見える叙述より、ずっと本物の部分を持っていると思います。こういったヘリゲルの行き方との対極が、レーヴィットです。彼はいわば上からの目線で日本人の精神生活を批評し、それは参考にすべきものを含んでいるとは言え、彼自身は1階の生活世界を自分で体験することがなかった。2階と1階のあいだをつなぐ階段が無いというのは、実は彼自身にも向けるべき批評ではなかったかと、思われます。否、何年も日本に住んでいたのに、和室と洋間が同一の階に併存していて出入り自由の襖ないし障子でつながれ、「切れ・つづき」の関係にある、という日本の一般的建築の構造に、気づかなかった。そして日本人が外来文化を受け入れて消化しながら自分の空間を失わなかったことには、さらに気づかなかった。

和室と洋間の「間」ないし「中」について、少し話しをつづけます。これも西田の「見るもの」と関係してきます。まず、西洋ではアリストテレスが「中」（メソン、メソテースト）を論じたこと、中国では儒教の「中庸」があること、仏教では龍樹の『中論』で言う「中」があることを、指摘しておきます。みな、それぞれ意味がちがいます。以前、日文研のあるプロジェクトに招かれて、そこで「中国人の研究者の話を聞きました。いわく、「〈中〉は中国思想もしくは中国文明の中心概念であり、宇宙軸の〈中〉、宇宙的なサイズの〈中〉である」と。「中華思想」の現代版のような話でした。

大乘仏教の「中」、すなわち龍樹の「中」は、もっと深い思想内容です。簡単に言うなら、有でもなく無でもない、何でもない、といった意味です。

日本人が一般に感受し表現する「中」は、それとも違います。私はこれを、真ん中を突き抜ける「中」、それも美的感性と結びつく仕方で真ん中を突き抜ける「中」、と言いたいのです。日本文化の特質として、完成した形式をさらに一歩突き破る、というところがあります。徹底したら禪になるんでしょうけれども、その手前にもあります。たとえば法隆寺は、金堂と塔とがシンメトリーになっていませんね。あの形式は、中国には先例がありません。日本の美意識は、最初から「アシュンメトリー」（非対称性）を基本とします。出雲大社をご存じの方は、入り口が右に寄っていることにお気づきでしょう。伊勢神宮は、建物としては左右同形だけれども、「御真柱」には、床を支える機能がなく、途中で止まっています。構造力学的な完成という観点からは、不可解の部分で、「アシュンメトリー」の感覚と通じるところがあります。それは「生花」や「書道」でも同じです。「芭蕉の言う「風狂」の狂も、一休の『狂雲集』の狂も、おなじで、人格円満なところを突き抜けて自由になるところ、常識からすれば狂っているけれど、常識に縛られない自由な境地です。それは、西田幾多郎の「見るもの」が「働くもの」に転ずるときの、もっとも活発な形とも言えます。このような「中道を破る、自由かつ美的な中」とも言うべきものが、日本の「中」です。

もう昔のことになりますが、ドイツのヘルツォーク大統領が東京に来られたとき、御前講演を依頼されました。早稲田大学がヘルツォーク大統領に名誉博士号を出したときのことです。私は、どういふことを話せば良いかと考えて、結局、ドイツも日本も超大国ではないが、小国でもない、「中」くらいの国であること、そしてその場合の「中」に意味があることを、述べました。人間の体で言えば、超大国の「骨格」ではあって、体内に行き渡ってこれを活性化させる「神経」あるいは「感性」に、与えられる役割りです。そう話を締めくくったとき、客席前列の大統領が演壇の私を見て、視線が合ったことを、思い出します。今なら、もう一言つけ加えて、ドイツの感性はとりわけ論理的方面に秀で、日本的感性は美的方面で繊細化していったと、締めくくりたいです。

「感性」と申しましたが、これは「美」の意識につながる部分です。白川静博士の説ですが、「美」という文字は、昔の古代中国で祭祀において神への供え物とされた「羊」から来るのだそうです。「大きな羊」が「美」という文字になります。しかし日本語の「うつくしい」は、「いつくしむ」です。小さきものを慈しむ感情です。この「慈しむ」は、仏教概念では、「大智・大悲」のうちの「悲」ともすびつきます。「慈悲」です。英訳では「コンパッション」となり、キリスト教の根本概念です。そこまでいくと、イスラム、仏教、キリスト教、等がせめぎ合うと同時に対話が必要になっている今日において、日本の美の伝統の奥に「世界」という広がりをもつ対話の場が開けてくること、予想されます。これは、哲学的には「見るもの」が日本的風土のなかで「働くもの」に転ずるときの、ひとつの可能性だと、考えます。私自身もいま、「コンパッションの現象学」という国際プロジェクトを、立ち上げています。

我田引水が始まるところで、私の講演を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会 大橋先生、どうもありがとうございました。皆様、今一度盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、続きまして基調講演お2人目、川勝平太静岡県知事にご登壇をいただきます。

川勝知事は、1972年早稲田大学を卒業後、オックスフォード大学で博士号を取得されておられます。その後、早稲田大学の教授、国際日本文化研究センターの教授、それから静岡文化芸術大学の学長等を歴任されまして、2009年より静岡県の知事として大変なご活躍をされているということは皆様ご存じのとおりかと思えます。ご著書に、『日本文明と近代西洋』、それから非常に名高い『文明の海洋史観』、『鎖国と資本主義』等があります。よろしければそちらのほうもごらんください。

それでは、川勝知事、どうぞよろしく願います。

講 演

「文明に東西ありや ― 日本文明の場の力」

静岡県知事 川 勝 平 太

Are there an East and a West in Civilization? — Japan as a global hub of civilizations

Dr. Heita KAWAKATSU
Governor of Shizuoka Prefecture

大城学長、東郷所長、ご列席の皆様、こしは京都産業大学が創立 51 年目を迎えられて、1 世紀の後半に向けて第一歩をたくましく歩み出し、また世界問題研究所が節目の 50 周年をお迎えになり、おめでとうございます。静岡県民 370 万人を代表し（笑）ご祝辞を申し上げます。その記念行事にお招きいただき光栄です。

大橋先生は、存命の哲学者の中で私の最も敬愛する哲学者です。ヨーロッパの哲学を縦横に論じられてきましたが、しばらくぶりにご尊顔を拝しますと、きょうは何となく禅僧の風で、ヨーロッパ哲学が禅と和しているという感想を強くしました。ご講演の最後に、慈しみは「空」の情意で、それが「悲」になるというメッセージに感じ入りました。

先生によれば、提示された図の洋間と和室の真ん中の「と」が大事だとのこと。そこで、日本列島という空間における和と洋の真ん中の「と」の位置を特定するとどこになるでしょうか。京都は東洋文化が開いた「和」の代表です。東京は西洋文化が絢爛豪華に花開いている「洋」の代表です。その真ん中にあるのは静岡県（笑）、あえて地名をあげれば富士山です。富士山の標高は 3,776 メートル。不思議なことがあります。富士山頂上の地名がないのです。国内の基本地図を作成している国土地理院が日本列島の地名をもらさず記していますが、ただ一か所、地名のないのが富士山頂です。頂上ははっきり開いた大きな火口で、そこは空ですから「中空」です。ちなみに日本人はみな姓名をもちます。ところが姓のない日本人が存在します。天皇です。姓がありません。陛下がもう一つお持ちでないものがあります。住民票です。失礼ながら陛下は苗字と住所のない存在であらせられる。

東京都 1,300 万の大都会の真ん中に皇居があります。その人口密度が一番低く、東京都のど真ん中も「空」ですから「中空」です。国土のシンボルの富士山、国民の象徴の天皇、その両者に「中空構造」という共通性があります。かつて河合隼雄さんが日本の神話や昔話を分析して日本文化の深層は「中空構造」だといわれました。天皇と富士山とはそれぞれ日本の国民と国土の象徴ですが、二つの象徴は中空構造をもっています。中空が全体の象徴であるのは逆説めいていますが、いわば空即是色です。

富士山と天皇という二つの象徴の相性はどうでしょうか。歴代天皇で初めて富士山をごらんになったのは明治天皇でした。明治天皇には直筆の手紙や日記はないとのこと。和歌しか残されなかった。明治維新で京都から江戸に向かわれる途次に大井川あたりで初めて富士山を見て感激され、従者にも歌を詠むように言われ、みずから御製を残されました。明治天皇の御製は 10 万首以上あるようですが、富士山について

あかねさす夕日のかげは入りはてて 空にのこれる富士のとほ山
美しい夕暮れの情景を詠まれた御製です。大正天皇の御製

こちよく晴れたる秋の青空に いよいよ映（は）ゆる富士の白雪
秋空に映える富士山が詠われています。昭和天皇の御製

ふじのみね雲間に見えて富士川の 橋わたる今の時の間（ま）惜しも
おそらく新幹線の車中からは富士山が一瞬にしか見えない、その時間が惜しく、もっと見ていたいというお心があらわれている御製です。今上陛下の御製は

外国（とつくに）の旅より帰る日の本の 空赤くして富士の峯（みね）立つ

外国から飛行機で帰ってきて日本列島にさしかかり、雲の上に聳える夕焼けに染まった富士山が見えたときの喜びがほとばしっています。浩宮皇太子殿下は皇室で初めて富士登頂に成功されました。そのときのお歌

雲の上（へ）に太陽の光はいできたり 富士の山肌赤く照らせり

平成 20 年 8 月 8 日早朝の富士山頂の光景です。午前 4 時半ぐらいに日がのぼり、朝日が雲海の上に出ると雲が白くなり、光が弱いので山肌は赤く染まります。朝の光が紅白を生んだお歌です。このように日本の国民と国土の象徴の相性は大変よろしいのです。

本日は「日本の普遍性を問う」という大テーマで、私に与えられたのは「文明に東西ありや、日本文明の場の力」というものです。

まず、文化と文明について私見を申し述べます。文化は文化人類学・民族学などで「人々の生活様式」と学術的に定義されています。生活様式は目に見える衣食住と目に見えない価値体系を含みます。生活様式は英語ではウェイ・オブ・ライフですが、平たく言えば生き方、暮らしの立て方です。暮らしの立て方は文化の数だけあります。京都の桂に国際日本文化研究センターがあります。日文研は日

本文化について学際的・国際的・総合的に研究する学問の府です。大阪の千里の国立民族学博物館は世界の諸民族の社会と文化を研究する学術機関ですが、民博では日本文化が十分に研究されていないので、日本文化を専門的に研究する機関が国際日本文化研究センターで、1980年代末に創設されました。民博と日文研とはあいまって地球上の民族の文化をことごとく網羅する研究機関です。

地球上に文化の数は幾つあるでしょうか。先ほど大城学長が現在話されている言語の数が6,000あると言われました。6,000の民族が現存していると言いかえられます。文化は人間が後天的に身につける全てのものを意味します。言葉はその最たるものです。どの言葉も別の言葉に翻訳可能ですから上下の差別はありません。人間は衣食住を欠かせませんが、食べるのに、ある民族はお箸で、別の民族はナイフ & フォークで、ある民族は手でというように食べ方は異なっても、そこに上下関係はありません。誰しも生まれてから言葉や衣食住のスタイルを身につけます。民族とは文化を同じくする集団のことで、遺伝的なものではありません。日本の両親に生まれても、英語圏で育つとその人はイギリス人、カナダ人、アメリカ人などになります。人種は遺伝的ですが、民族は後天的に身に付けた文化を同じくする集団です。民族の数だけ文化の数があります。文化は、人間の生活があるところにはどこにでもあります。その意味で普遍的で、文化は遍在しています。

次に文明はどうでしょうか。文化の定義が学問的に明確なのと対照的に、文明の定義は学者によって違います。ここでは学説に立ち入らず、私なりに定義づけします。文化は人間の生活があるところにはどこにでもあり普遍的なので、文明の基礎には文化があるとしなければなりません。本日のテーマに即して、結論を先にいえば、文化は遍在するのに対して、文明には東西、いや東西南北があります。いかえれば偏在します。文明には発祥地があり、文明は動き、融合もし、反発もする。例えば漢民族の文化である漢字、律令、儒教を古代の日本人や朝鮮の人たちは憧れて取り入れました。ローマ人の文化で漢字に当たるのがローマ字、律令に当たるのがローマ法、儒教に当たるのはキリスト教です。ローマ字は便利だということでアルファベットをローマ以外の民族が使うようになる。ローマ法も民事の争いを解決するのに便利だということで、ローマ人の支配した異民族の間に広まり、洗練されてナポレオン法典になり、それを御雇外国人のボアソナードを通して近代日本も取り入れました。広まってきたわけです。キリスト教もローマ帝国の国教になり、虐げられた人たちも支配者も神のもとで平等であるという思想を受け入れることで異民族にも広まりました。ローマ人の文化も漢民族の文化も異民族に憧れられて広まりました。憧れられるということは求心力があるということです。求心力のある文化が活性化するとき遠心力を持って拡散していきます。そのような意味において「文明とは憧れられる文化である」と定義できます。憧れられると、その中心地に人が集まってくるので、言語、宗教、衣食住のほかさまざまな文化要素が広がります。そうすると、それが文明と言われるようになるということです。

さて日本です。日本の文化は縦横に論じることができます。日文研がその例証です。ではそもそも

日本は文明でしょうか、そこがポイントです。基準は日本が憧れられる対象であるかどうかです。日本史を振り返れば、はっきりしているのは、日本人は外の文化に憧れてきたという事実です。7世紀初めに聖徳太子が小野妹子を遣隋使として留学生を中国に送りました。遣唐使が続き、894年に菅原道真が遣唐使廃止を建言するまで、日本の最高の頭脳が唐に行って、唐の文物を学び、もたらしました。宋代中国にもたくさんの日本の学僧が留学しています。栄西禅師しかり、道元禅師しかりです。鎖国の江戸時代は日本人の海外渡航は禁じられました。明治になり、欧米の文物に日本人は憧れました。当初は南蛮と軽蔑をしたわけですが、とてもかなわないということで、素直に西洋の文物を入れることにし、西洋人を招き、またみずからもイギリスやドイツやフランスに憧れて留学しました。日本は長く外の文化に憧れる存在でした。日本に文化はありましたが、文明は日本の外にあったのです。

青年は青雲の志を持って高い文化に憧れますから、青年が憧れて留学する先が文明であると言っていいと思います。アメリカは、戦後日本の青年のみならず、世界中の青年が憧れました。アメリカは現代の文明です。古代にあってはローマや唐が文明でした。現代はアメリカ文明の時代です。このように文明は動き移り変わります。それゆえ、文明は時と所を変えます。文明の様態は、普遍の遍ではなく、にんべんの偏で、いつか、どこかが文明になりますから、偏って存在します。文化は遍在し、文明は偏在するのです。

文明は時・所を移り変えます。いいかえると、どの文化も憧れられさえすれば文明になる可能性があります。日本が文明かどうかは、日本が外国人から憧れられているかどうかということです。その指標の一つは来日する外国人留学生です。日本への最初の外国人留学生は中国人でした。日清戦争で清国は日本に敗れました。それ以前にも清国はアヘン戦争、アロー号事件等々で西洋列強にひどい目に遭わされましたが、留学生を送りません。ところが、夷狄と思っていた日本に敗戦して初めて数百人の留学生を送ってきました。中国人留学生は日本の近代化に瞠目し、帰国後に変法自強の運動をおこします。変法の法とは体制・制度のことで、それを変えて自らを強くしようという運動です。日露戦争で日本はロシアに勝つ。国力をつけた日本に、数千人の中国人が憧れて来日しました。たとえば李大釗という方は中国共産党の理論的支柱になった方ですが、河上肇先生を心から尊敬されていた方です。周恩来もそうでした。たくさんの留学生が中国から来ました。かつて日本人が中国に憧れていたのですから、これは日中間の文明の逆転です。近世以前の日本の建設に中国文化の果たした役割は巨大ですが、現代中国の建設に近代日本の果たした役割はそれに劣りません。中国人留学生はしかし日中戦争で途絶え、戦後は再び日本はアメリカを中心に留学生を送る時代になりました。けれども、今、日本に外国人留学生がどのぐらいいるか。18万人ぐらいはいます。日本からの留学生は大体平成4年の約8万人をピークに減少し、今は6万人ぐらいに減っています。もう日本人が外国に憧れて留学するという時代は終わりました。アメリカにも日本人はそれほど憧れなくなったのです。中曽根内閣のときに10万人の留学生を呼ぶ計画を立てましたが、2000年頃に日本から海外に留学する人口

よりも、海外から日本にお越しになる青年の数が上回り、すぐに10万人を超えました。今や外国人留学生が20万に達するまでになりました。外国人の中心はアジア各国からですが、欧米の青年もいます。この事実を照らすとき、日本が憧れられる存在になったと言えます。それゆえ「日本文明」を論じうるのです。

論点は日本文明に普遍性があるかどうかです。本学の世界問題研究所における4回目のテーマで西田哲学を取り上げられました。本日は「見るものから働くものへ」がテーマの副題ですが、これは西田幾多郎の「働くものから見るものへ」という昭和2年に西田が脂の乗り切ったころの作品、1870年生まれですから57歳のときに書いた論文集のタイトルをひっくり返したものです。見ることは働くことだというのが論点です。大橋先生は、台風の目と台風との比喻で分かりやすく説明されましたが、見るものが台風の目で、目がなければ台風ではありません。台風がゴーゴー吹き荒れていると、そこには必ず台風の目がある。見るものと見られるものとの間に不可分の関係があり、見ることが同時に働くことでもある。働くことが見るものの中にあり、主客が合一し、台風の目を自覚すれば台風が立ちあらわれてくる。自己に対象を取り込む姿勢が働くものから見るものへということですが、見ることイコール働くことで、働くことの中には意志が働いています。意志が働くということは、意志を働かせるという意志と、働かせないという意志とがあります。両方の意志の根底に行為的直感があり、行為的直感の働くところが西田哲学における場所です。場所といっても、ある場所を特定すれば別の場所があることになり、全ての場所が成り立つ場所とは、あらゆる有の場所を支える無の場所であり、無が有の底にある。大橋先生も先ほど「底」という概念を使われました。西田哲学の絶対無の場所については、大橋先生の著作で丁寧に説明されています。

先ほどの和室と洋室の話に立ち戻ると、京都が和室、東京が洋間という比喻はわかりやすいと思いますが、東京が首都になってから、明治・大正・昭和時代と続き現在は平成の世です。明治・大正・昭和・平成の前は江戸時代、江戸時代の前は秀吉・信長が活躍した場所によって安土桃山時代。その前は足利将軍が京都に幕府の置いた場所から室町時代。室町時代の前は南北朝の内乱がありますが、その前は鎌倉時代で、その前は平安時代で、さらにその前は奈良時代です。これは教科書に載っており小学生でも知っています。奈良、平安、鎌倉、室町、安土・桃山、江戸と並べてみると、日本の歴史は「場所」で時代区分をしているのです。場所による時代区分は、世界各国の歴史でも珍しい日本史の特徴です。場所の時代区分で言うなら、明治・大正・昭和・平成は「東京時代」です。仮に首都機能が移転されれば、「東京時代」という用語が定着すると思います。東京時代がどういう時代であったかをめぐって、いろんな論説が生まれるでしょう。けっして現実離れの話ではありません。実際1990年に衆参両院で満場一致で首都機能の移転の決議がなされ、法律を定めて移転先を検討する国会等移転審議会が設けられ、1999年12月に審議会の答申が出ています。衆議院特別委員会で移転の可否が論じられました。第一候補地が那須の御用邸の近く的那須野が原です。ところが結局決めら

れないまま3年がたち、昨今の日本の政治情況と同じで、決められないということを決めて宙ぶらりんになっています。仮に答申にそって那須野が原に国の機能が移りますと、間違いなく「東京時代」という用語が定着するでしょう。東京時代の中身は明快です。江戸情緒は東京に一部ありますが、城下町文化としての江戸文化がもっとも残っているのは、加賀百万石の金沢だと思います。東京は、江戸の遺産を食いつぶして欧米の文物を入れ込んできました。それが東京時代です。国会議事堂は何となくアメリカのコンGRESSと比べますと地味なお墓みたいな感じです。東京タワーのモデルはエッフェル塔、ディズニーランドのモデルは言うまでもなくアメリカです。そのように東京的なものには西洋にモデルがあります。しかし、最近はモデルの西洋を超えるまでになりました。先ほど心柱の話が出ましたけれども、スカイツリーは日本刀の反りの美を意識しています。スカイツリーの下部は三角形ですが、反りを加えてせり上げていくと丸くなる。そこに匠の技が活かされており、西洋伝来の技術に和の匠の技を加え、西洋の技術水準を抜きました。台風や地震がある日本では耐震性・耐風性の高い機能を入れ込まねばならず、そこに日本独自の匠の技を加えるまでになりました。現在の東京は西洋のどの都市とも見劣りがしません。欧米文明の基礎に科学がありますが、科学のレベルで世界の水準を示すノーベル賞受賞者は、21世紀になってからはアメリカに次いで世界第二位が日本です。イギリス、ドイツ、フランスを抜いています。日本は自然科学分野でのノーベル賞受賞者数も世界で2番目です。もはや欧米の文物を追いかける時代ではありません。欧米の文物を取り入れ、取り込み終わり、欧米に勝るとも劣らない日本になった。それが「東京時代」です。

それ以前の江戸、室町、鎌倉、平安時代はどういえるのか、これも「憧れ」を基準にした文明の観点からみると明快です。平安時代は遣唐使を送っていることから知られますように、唐の文物に憧れて、それを京都に取り込んだ時代ですが、9世紀末には唐の文物を取り込み終えて国風になっていきました。それが平安時代です。

鎌倉時代は、通常は公家政権から武家政権へという言い方をしますが、文明の観点から見れば、鎌倉を特色づけるのは禅で、禅は鎌倉五山に代表されます。建長寺や円覚寺等々です。五山は鎌倉独自のものではありません。南宋の首都臨安を中心に臨済宗の五山を模倣したものです。南宋から無学祖元等が来日して開山しました。南宋が元に滅ぼされ、学僧が日本に逃げて来たのです。京都では旧来の唐代の仏教をしている学僧には禅は新規で受けつけることができない。ところが鎌倉幕府の要人が新しい南宋の禅文化に憧れて飛びつきました。武士の生き様と自力本願の禅の思想がぴったり合い、南宋の禅文化を大切に五山文化が鎌倉に根づきました。それが鎌倉時代です。五山文化は従来の天台仏教とは趣が異なります。仏像を拜むよりも、座禅が主です。新しい南宋文化に憧れた京都の後醍醐天皇は鎌倉五山を模倣し京都にとり入れたくまりました。やがて南禅寺を中心に京都五山ができます。京都五山は、鎌倉五山を媒介にしますが、南宋の五山文化への憧れの帰結です。

南宋の首都臨安は現在の浙江省の省都、杭州です。そこは長江など大河川の流域です。その昔、唐

の中心は洛陽や長安ですから黄河流域です。黄河は乾燥地帯の黄砂がまじって黄色い。乾燥地帯なので主食は畑作物で、タンパク質は牧畜からとる。黄河流域の文明は畑作・牧畜が生業です。一方、揚子江流域は湿潤です。中国の南北の相異は運搬手段に注目して南船北馬などともいわれますが、今は「南水北調」と言っ、黄河の水が断流するので、南の長江の水を整えて北に送ることで北京の水不足を補おうとしているほど南部は水に恵まれております。水中には魚がおり、魚でタンパク質をとり、水を活用するのは稲ですから、稲作・漁労が生業になります。中国には黄河流域の文明と長江流域の文明の二つの文明があり、前者は平安時代にとりこみおわり、後者は鎌倉時代に入りました。

中国の長江文明のエッセンスは鎌倉を経て京都に入ったのです。室町時代は中国の北の黄河文明と南の長江文明の両方を入れ終わった時代です。雪舟は中国からは学ぶほどのものはないという判断をしています。こうして中国文明から卒業するのと時を重ねるようにして日本独自の能、狂言、生花、茶の湯、数寄屋造り等の文化が発現してきます。中国文明を平安、鎌倉、室町で入れ終わったのですが、それは京都を中心としたので京都時代ともいえます。それは中国を中心にした東洋文明の吸収の時代です。

安土桃山時代の安土城、桃山城は天守閣があります。天守閣の天守というのはもともとデウス、すなわちキリストの神の漢語の「天主」で、安土城では「天主閣」と書かれたようです。このようにヨーロッパ文化が入ってきました。鉄砲も南蛮渡来です。しかし、キリスト教に憧れたわけでもなく、鉄砲も伝来後二・三年で自給生産しています。言いかえると、西洋文化を媒介に、それまでの日本になかった独自の城下町文化をつくりあげたわけです。江戸時代の特徴は城下町文化ですが、そのモデルは外国にありません。したがって、江戸時代は日本が東洋文明から自立をした時代であると言うことができます。最近「ボックス・トクガワナ（徳川の平和）」と言われて注目されています。

東京時代の終焉の意味するところは、日本が江戸時代以前に東洋文明を取り終わったあと、西洋文明も取り込み終わったということです。日本には西洋文明も東洋文明も入れ終わったという意味において、現代の日本文明は東西両洋の文明を兼ね備えた普遍性をもっていると言うことができます。

現代の日本文明を文明史の中に位置づけるのに、文明をその始源から眺望してみたいと思います。文明の起源と言いますと、農耕文明としての四大文明があげられますが、今回取り上げられているテーマは思想なので精神文明の始源という観点からしますと、今から2,500年ほど前に「枢軸時代」とカール・ヤスパースが名付けた精神革命が生じました。西はギリシャの自然哲学、中東の一神教、インドの仏教、東は中国の孔子に代表される諸子百家が同時多発的に生まれ人類は精神革命を経験しました。その遠原は人類が農耕文明段階に入ってそれぞれの地域で培われた知恵が孔子、ゴータマ・シッダールタ、預言者、ギリシャのタレス等の自然哲学者に集約的にあらわれたとすることができるでしょう。興味深いのは4つの起源地で生まれた精神が移動したという事実です。旧約聖書の預言を集約したイエス・キリストはユダヤ人で中東出身です。キリスト教は西方に動き、ローマ帝国の国教

になりアルプスを越えて西洋はキリスト教に染まります。西方ないし西北に動いたのです。ギリシャの自然哲学は一旦イスラム世界でアラビア語に翻訳され、12世紀ルネサンスといわれるアラビア語からラテン語への大翻訳時代を迎えます。これは日本の伊東俊太郎先生が『12世紀ルネサンス』という名著で書かれています。その前にハスキングという学者も同じようなことを書いているのですが、ギリシャ哲学のラテン語への翻訳が12世紀ぐらいから始まり、ギリシャ哲学がヨーロッパのキリスト教世界に入っていました。ギリシャ哲学とキリスト教との間では軋轢や曲折がありましたが、最終的に一神教の真理をギリシャの理性で明らかにしていく運動すなわち科学革命に結実します。科学が技術に適用されて産業革命になるという筋書きを描くことができます。

一方、仏教と儒教は起源地から東方ないし東北に移動します。仏教はヒマラヤ、テンシャン山脈を越えて東北へ移動し中国大陸・朝鮮半島を経て日本に渡来しました。儒教も東ないし東北の朝鮮・日本に移動しました。仏教・儒教を日本が取り込み終え、東洋文明から自立したのが江戸時代までの時代です。その後、西に向かっていた一神教とギリシャ哲学の融合した西半分の2つの精神文明の遺産も明治以降には日本に渡来しました。こうして人類の精神文明の4つの遺産はことごとく日本に入りこみました。現代日本には、人類が生み出した精神革命の遺産が血となり肉となっています。その意味でも日本文明は普遍的です。

では、どうしてほかならぬ日本は人類の諸文明を自家葉籠中のものにしえたのでしょうか、また、その普遍性を論じうるまでになったのでしょうか。隣の韓国や中国やベトナムなどでは、その条件をもったとはいえません。どうしてこのような大きな違いが生じたのでしょうか。たとえば、19世紀後半に欧米列強がアジアに圧力をかけてきたとき、アジアの大半は植民地や半植民地になりました。しかし日本だけは西洋から強制されずに主体的に西洋の文物を取り入れ、しかもそのことに成功し、果ては欧米文明に伍するまでになり、かつ凌駕するまでになった。そのようなことのできたのは非西洋圏では日本だけです。

いろんな議論のあることは承知していますが、私は「見るもの」と「働くもの」との関係で説明します。何を見るかがポイントです。働くものの根源を見るという立場をとります。根源とは主客未分の時のことです。根っこを見る。時代的にいえば奈良時代以前です。それはこういうことです。先ほど仏教と儒教は東方に移動し、一神教とギリシャの自然哲学は西方に移動したと言いました。そう簡単に言えるのかといいますと、実はもうすこし複雑です。例として、日本の国宝第1号の京都の太秦の広隆寺の弥勒菩薩をとりあげてみます。弥勒菩薩像をカール・ヤスパーズは現物は見なかったのですが、写真で見て、これほど美しく平和な像を見たことがないと激賞しました。

では弥勒とは一体何なのでしょう。最近、司馬遼太郎さんの没後二十周年ということで司馬遼太郎論がたくさん出ています。司馬さんは長編が有名ですが、短編に『兜率天の巡礼』という秀作があります。兜率天とは弥勒のいる所です。弥勒は56億7,000万年後に衆生を救うために下生する未

来仏です。「弥勒はキリストに近い。兜率天は天国に似る」というのが司馬遼太郎さんの見立てです。つまり弥勒信仰はキリスト教信仰だということです。しかし、少し知識のある方は、弥勒とはマイトレイヤーの漢字訳で、マイトレイヤーとはゾロアスター教のミトス、ミスラであることを御承知でしょう。弥勒はゾロアスターの神です。ゾロアスターの神が漢語になって弥勒になり、弥勒菩薩像の形で日本に渡来していたのです。このように拝火教のゾロアスター教の渡来もあったと考えられます。キリスト教についても似たことがいえます。例えば聖徳太子が、議論のあるところですが、厩戸王子と言われるのはイエス・キリストとのかかわりがあるという議論が戦前からあり、キリスト教のネストリウス派景教が渡来していた可能性が指摘されてきました。弥勒菩薩の渡来時期は聖徳太子のころ600年前後です。弥勒菩薩像は信仰する人間とともに渡来したと思います。飛鳥時代の日本にはキリスト教の気配もゾロアスター教の気配もただよっています。当時の日本に渡来したもののの中に西洋の精神世界の原型になる宗教的遺産もあったということです。

注目すべきことは、弥勒信仰が仏教の名のもとに仏像として渡来したということです。それ以上に注目すべきことは菩薩像すなわち「物」として渡来したということです。欽明朝のときに仏像・教典が渡来し、仏像を見た欽明天皇は「きらぎらし」つまり何と美しいと言われていました。仏教は美術品として渡来したのです。仏教の教典もさることながら、仏像が併せて渡来しました。今日で言うと見事な工芸品・美術品として渡来したということです。一方、ヨーロッパに広まったキリスト教は「初めに言葉あり。言葉は神とともにあり。言葉は神なりき。よろずのものこれによりて成り、成れるもの一つとしてこれによらで成りたりはなし」とヨハネ伝にあるように徹頭徹尾『聖書』における神の言葉が重視されます。「言葉」との対照でいえば、日本に渡来した精神遺産の様態は「物」なのです。日本に渡来したのは「物」であり、しかも美しい芸術品であったのです。

まもなく時間切れのようで、「終了せよ」のサインが出ました（笑）。

大橋先生は花、四畳半の美学、茶の湯など、日本の美にかかわる著作がたくさんあります。禅も美と関係しています。中国から入ってきた禅は仏像を拜むよりも座禅が修行です。もちろん仏様は拜まれますが、身の回り、庭などをきれいに整える、自分の師の絵を描く、茶を一服たてる、花を供える。こうした禅の修業は偶像を崇拜しないイスラームと深いかかわりがあるように思います。イスラームは7世紀から8世紀にかけて勃興しますが、それがゾロアスター教の本拠地イランからゾロアスター教徒を東方に追いやりました。それとともにイスラーム思想も東方に移動しました。その影響が唐から宋にかけて仏教にもあったと思います。唐代の仏教は仏像中心主義です。そのような仏像仏教から、仏像を重視しない宋代の坐禅仏教へという変化をもたらしたとも思われます。イスラーム思想が禅の思想に潜んでおり、それが日本に渡来したともみられるのです。それはこれから説明していくに値する課題だと存じます。京都や奈良にあるのは美しい仏像です。しかし、きょう来られていらっしゃる老師の静岡の臨濟寺の庭はきれいで、襖絵、佇まいの美しさがあり、この禅味が生活の総合芸術「茶

の湯」に発展していきます。結論的に西洋と日本の違いを単純化して図式化すれば、ヨーロッパでは宗教が科学に化け、日本では宗教が芸術に化けたということです。

さきほどゾロアスター教に触れましたが、ゾロアスターのドイツ語発音はツアラツストラです。1880年代にニーチェは「ツアラツストラかく語りき」を著きました。ツアラツストラすなわちゾロアスターはペルシャの思想です。ニーチェのいう「万物流転」は日本でいう「輪廻転生」と通底しています。ニーチェの思想の原型を見ていくとショーペンハウエルが1818年、19年に発表した『意志と表象としての世界』に行きあたります。同書でショーペンハウエルが論じている核心はウパニシャッド哲学です。同書の結論は「無」で終わっています。ショーペンハウエルは人間はもとよりカントの「物自体」もふくめ全ては意志からなり世界は意志の表象であるといったのですが、意志と彼が言ったとき、そこに西田幾多郎の「見ることは働くこと」であり、働くことの底に意志があり、意志の底に好意的直感があり、そこは無であるという思想と通底してくるのです。インド・ヨーロッパ語族の発見が18世紀末のことで、19世紀にヨーロッパにおいて仏教、ウパニシャッド思想が入り、ついに19世紀末にゾロアスター教も入ります。

こうした仏教やゾロアスターの思想を、弥勒などの仏像という「物」をとおしてですが、ヨーロッパよりもはるか早く1,000年以上も前に受け入れていたのが飛鳥時代の日本です。飛鳥時代の日本には仏教・儒教のみならず中東の一神教の思想も含めた全体性があり、それは混沌とした状態で存在したということです。それが始源の光景です。ヨーロッパの自然科学は一神教とギリシャ哲学の融合の帰結ですが、カントはニュートンに代表される自然科学の哲学的基礎づけをしました。すなわち「純粹理性批判」で物理学的認識の客観性を絶対空間・絶対時間という感性の先見の形式で根拠づけたのです。一方、日本では精神革命の遺産は芸術と化しました。西田幾多郎は、「働くものから見るものへ」という考察からさらに長い哲学的思索を重ねて、その静学的思索を最後は動学的思索へと深め、果てにポイエーシス（制作）の概念を中心にすえたとき、「見るものから働くものへ」という立場となって、それは物自体の自己表現として芸術の哲学的基礎づけをしたといえるのではないかと。西田幾多郎は見られるものと見るものが一体になるのは芸術的表現だと言っています。美はカントの「判断力批判」が論じたテーマです。真・善・美のうち、カントが成功したのは「真」の哲学的基礎づけをしたことで、「美と崇高」を論じた「判断力批判」は中途半端な印象をうけます。西田はそれを受け、世界を観照する見るものの立場から脱し、ポイエーシス=つくる働きが芸術になることの哲学的基礎づけを行ったといえるのではないかとということです。カントのやり残した仕事を西田幾多郎が引き継いだともいえます。そうした流れで見ると、西田哲学や日本文明には普遍性があるといえます。東西両洋の文明を取り込み終わった現在、我々はそれをどのように世界に向けて発信するかという課題を突きつけられていると思います。

与えられた30分を1分超過しました。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

司会 川勝知事、ありがとうございました。今一度盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、頭もいっぱいになりましたところで休憩に入りたいと思います。今が31分ほどですので、45分からのリスタートといたしたいと思います。ほぼ15分ほどあります。

その間に、私はアンケートと申し上げましたが、むしろ質問票と申し上げたほうが正確です。質問票がお手元にあると思いますので、そこにご記入いただきまして、それを学生が3人ほどフロアを回っていますのでお預けください。この15分の間によろしくお願いいたします。

それでは、休憩に入りたいと思います。

第二部 パネル・ディスカッション

基調講演者によるディスカッション

司会 これより第2部のほうに入らせていただきたいと思います。第2部はディスカッションになっておりまして、まず最初に30分間、大橋先生、それから川勝知事、東郷所長の司会のもとで対談をしていただきます。

それでは、両先生及び東郷所長、ご登壇ください。ここから司会は東郷先生のほうにお任せいたしますので、よろしくお願いいたします。

東郷 それでは皆さん第2部の最初の30分ということで、いよいよ竜虎相うつ、大橋先生と川勝先生とのお互いのディスカッションをお願いしたいと思います。

一言だけ申し上げますと、実は私、京都産業大学世界問題研究所長の仕事をしているとともに、静岡県の対外関係補佐官という仕事もしております、2011年から川勝平太知事に静岡県でお仕えしております、川勝知事のお話というのは何度も伺ってきているのですけれども、きょうはまず川勝知事が普段とところどころで言っておられることをまとめて伺う機会がありまして、本当にありがとうございました。大橋先生の哲学のお話は、本ではこの数カ月遅まきながら一生懸命読んでいるのですけれども、きょう初めて伺うことができまして、私としては、竜虎既に相うつて、圧倒されているというのが今の正直な気持ちでございます。

川勝知事は一番最後の結論のところ、日本はこれまでの世界文明というものを時間的、場所的いろいろな形で受け入れて、どちらかといえば憧れる国であったものが憧れられる立場にそろそろなってきた。問題はその日本がこれからどういう発信をしていくかということにあるところ、で話を終えられたと思うのですが、そのあたりについて、大橋先生、どのように思われるでしょうか。その他川勝知事のお話についてまず大橋先生のコメントからお願いしたいと思います。

大橋 まずコメントというより、1つだけ付記しますと、いま私が所長をしている「日独文化研究所」は、『文明と哲学』という年報を出していますが、その創刊号に、川勝知事さんの文明論を寄稿していただきました。そこでは、「文化」を論じるのも良いが「文明」という視点が大事だと、述べられています。たしかに「文明」という言葉は、さかのほればカントまで行き、「文化」という語感とはかなり違った方面を含意します。川勝知事さんの御高論をも念頭において、年報の表題を「文明と哲学」としたのです。

今後、中国及び欧米の文明を取り込み終わった日本の文明が、どこへ行くかという問いは、ますま

す大事になってきています。その場合、知事さんも私も、最後に「美」という観点を入れました。その観点は、「力」という観点と交差します。知事さんも先ほど中国の覇権主義の力というものを語られました。その「力」を、最終的にどこに見ていくべきかです。軍事力という力が、あります。中国はそれを最大限に延ばそうとしています。他方で、「感性の力」という力もあります。「美的」と「感性的」は、ドイツ語ではおなじ「エステーティッシュ」という語となります。もともとはギリシア語の「アイステーシス」（感性）という語から来ます。科学研究にも、そういう感性の力、美に通ずる力が作用することは、あるのではないのでしょうか。

哲学にも、論理だけでなく、感性が作用します。こちらのほうが基本的とすら、言えます。私の関係している日独文化研究所は、賛助してくださる企業がいろいろありますが、その企業の中には、哲学はもういい、もっと現実に役立つ事業をやってくれ、という声もあります。それでも援助していただくのだから、有り難いのですが、同時に、もどかしいものも感じます。普通の意味での「産業」において先を行く先進国は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、そして日本の五カ国、それにロシア、中国、等がづくわけですが、最初の4つの国、すなわち英、仏、独、米は、哲学思想の方面でも先端です。さきほど、京都産業大学は大学名のなかにすでにきちんとした文化的展望を含めているということ、伺いました。まったく我が意を得る感じです。日本は孤立言語の国として、言語コミュニケーション上のハンディが国際交流においては、ありますが、逆にそれが利点に転じて、西田幾多郎の哲学のようなものを生むことにも、つながっています。

要するに今後、美的感性の力、慈しみの意識、といったところが、見えない力として大きく作用する、というところを大事にしたいと思っています。

川勝 最初に文化と文明の違いについて一言つけ加えますと、文明には憧れの感情がともないますが、文化には懐かしさの感情がともなうように思います。懐かしいという感情には悲しいばかりに慈しむという情意の働きがあるように思います。

力の問題についてですが、幕末に欧米と出会ったとき、日本人は欧米を列強とみなしました。むき出しの力の存在とみたのです。横井小楠は国是三論「富国・強兵・士道」を著して、富国策や強国策だけでは争いになるので士道（武士道）で支えよ、これが国是三論の主旨です。士道（武士道）は当時の為政者に共有されていたので表面に出ず、富国強兵が国是になりました。富国強兵を英訳すればリッチ・ネーション・ストロング・アーミーで意味をなしません。富国強兵は中国の古典から横井小楠ほか当時の日本人が採用したもので、西洋を富国強兵の列強と捉えた。富国強兵は欧米の自己認識ではありません。欧米は自らを「文明」、欧米以外を「野蛮」と認識していました。日本から見れば「力の文明」です。力の背骨に知の体系としての科学があり、それを体現しているのが産業・軍事技術で、これをマスターすることを明治の日本人は決意した。

国が整えるべき体系について高坂正堯先生が、力の体系・利益の体系・価値の体系の3つが三本柱

だと言われたことがあります。力の体系は軍事力、利益の体系は経済力、価値の体系は文化力におきかえられます。軍事力と経済力については、日本は戦前期に軍事力で、戦後はエコノミックアニマルとも言われながらも経済力を発揮して大国になりました。しかしともに限界に突き当たり、心の豊かさが求められています。浮上したのが文化の力です。文化の力で人々を引きつけることができれば文明になれます

根本は意志の問題です。「意志」を正面から哲学的に論じたのはカントに影響されたショーペンハウエルの「意志と表象としての世界」です。ショーペンハウエルはカントの物自体も意志の表象とみしました。それに強く影響されたニーチェは意志一般を「力への意志」に集約しました。マハトへの意志が全てだとした。そのことが後にナチスに悪い影響を与えたように思います。

一方、文化にかかわる日本人の感性的な意志、情意はどういうものか。例えば富士山は噴火するから畏怖され信仰の対象になりましたが、きわめて美しい存在なので芸術の源泉ともなりました。ユネスコの世界無形文化遺産になった「和食」は四季折々の旬の食材を揃えて、食材に応じて盛皿にも配慮します。お皿も1つでなくて、春夏秋冬で器の種類も形も色も違う。目で愛でていただく美しさがあります。日本ではこのように、自然についても、生活文化についても、美への傾斜が強い。美しいと思うのは主観的で普遍的とは言えないようですが、誰もが美意識を持っているという意味では普遍的です。何を美しいと感じるかは人それぞれ違うので、大橋先生が言われたように、多様です。多様性を許す価値は、真・善・美のうちでは、美が断トツです。ヨーロッパの重視するのは真理です。真理は一つです。ヨーロッパでは真を重んじる価値に偏って神の真理を体現する科学万能主義になりました。美は真に勝るとも劣らぬ価値です。美は多様です。そのような美の価値への傾斜を体現しているのが日本ではないか。美の力とはひきつける力です。

日本における美の根源は自然だと思います。自然は多様です。自然の中で美の粋は、大橋先生とも同じだと思いますが、水です。水がきれいなので「みずみずしい」とか「水際立った」とかの表現が生まれました。水の清らかさは日本人の美意識の基本でしょう。喧嘩するのは汚いので「水に流してきれいさっぱり仲よくしなさい」と言う。日本では水がきれいだからそう言える。水は山から供給されます。山岳の美しさが背景にあり、日本の山岳を統合するのが富士山です。富士の白雪は溶けると水になる。水の清らかな美しさが、美意識自体は多様ですが、日本では水が物的基準になっているのではないのでしょうか。

清らかな水の美という基準から自然環境は汚してはならないという環境意識が生まれます。地球は水の惑星です。水の文化を文化力の基礎にできるのではないか。欧米が力の文明で世界を征服したとすれば、日本は美の文明で世界をひきつけることができます。

東郷 大橋先生に今のことについてさらにコメントをお願いしたいのですけれども、あわせて、大橋先生が先ほどのプレゼンの結論としておっしゃられた、『美しい』という言葉から「慈しむ」とい

うところに来た、「コンパッション」ですね。これをこれから日本発のメッセージとして研究していきたい』と言われたと思うのですが、そのことと「美」ということを含めてご説明いただきながら、川勝知事のコメントにコメントいただけますでしょうか。

大橋 ありがとうございます。川勝知事さんのご著書で『文化力』というご本があります。さきほどの「文明」という概念と「文化」という概念を併せたところに出てくるのが、「文化力」だと言えるかと思います。「文化」に「力」という概念を加えたものが「文明」だと言っていいと思うのです。その文化力の核心に美的なもの、感性的なものがある。その感性を育む土壌として、日本の「自然」が、大きな意味をもつと思います。日本は火山層の上に乗っている国、また巨大な活断層が走る国、ということで、巨大な自然災害の危険と同居しているわけですが、他方で、広大であるが単調な大平野とちがって、変化に富み、そのことが山紫水明の自然をもついています。ヨーロッパへ飛行機で飛ぶとき、ユーラシア大陸の河川は、たいへん長いことが、機上から見てとれます。巨大な蛇が大地を蛇行していきます。日本では長河といっても、大井川くらいでしょうか。一番長いのは信濃川ですか。それでも「大河」という感じじゃないですね。本州の中央部は、富士山は孤立の秀峰で山系を持ちませんが、日本アルプス系の山脈からは、日本海側と太平洋側に河川が流れていく。流れが早から、アマゾンや黄河のような濁流にならない。水は基本的に澄んでいるべきものとして、人々が感受しています。その水の感覚に加えて、日本の自然は俳句の季語と一緒に、毎月変わっていきます。

中国で美しいとされるものは、古代では大きな羊でしたが、文明史としては、玉（ぎょく）とされるようです。宝玉ですね。それに対して日本で何が美しいかという、「みずみずしい」といった言葉にあらわされるように、「水」という連想の表現が非常に多いです。「水際だった」とか、「濡れ場」とか、「水もしたたる良い男」とか。そして「流れ造り」といった、清流の線を基本とした建築用語もあります。そしてヨーロッパ絵画にはほとんど見られない日本画のモチーフとして、「雨」があります。「宝玉」という永劫的なものよりは、さっと流れる透明な水に、日本人は美を感じていました。その点で強調したいのは、神道にも通じる「清」という語です。「清らか」、「清々しさ」、等は単なる衛生観念でないですよ。その「清」という文字も、さんずいです。つまり「水」です。その美的なものが濁ることはあるが、「濁」もさんずいです。

そこから先ほどのコンパッションにどうつながっていくかという、平安朝文学では「はかない」という言葉が、よく用いられた。「はかない」というのは「はか」（涯、果て、際）がない、ということ。単にとりとめがないというのではなくて、実体性を持たないという空虚感です。それが鎌倉仏教の影響を受けると、「無常」という自覚的概念になる。これは、唐木順三という人が言ったことで、きわめて正鵠を得ていると思います。単にはかないという気分を、意志的に自覚化する。ニーチェであれば、全てがニヒルであれば、「それなら、もう一度」と、そのはかなさを引き受ける意志が、働く。だから、同じく「コンパッション」（慈悲）といっても、平安朝と鎌倉時代とでは、時代

の感性の変化で意味内容も変わってきます。そこから「空の情意」という、あれは西谷啓治さんの言葉なんです、西洋哲学ではまだ表現されたことのない言葉が、出てきます。ニーチェが一番嫌ったのは「同情」で、それは、こちらが安全地帯にいて可哀想な相手に上からの目線で手をさしのべる、という姿勢です。しかし「悲」というのは、そんなのじゃなくて、一緒の立場におりる。もちろん、困っている人と一緒になったら自分も溺れる、ということがありますが、しかし、そういう計算をも取り払って出てくる「空の情意」というものがある。そこから湧き出てくる情意というものに、「はかなさ」→「無常」「覚悟」といった、感性の変遷と深化があって、それはキリスト教の「愛」とはまたちがったものになっていくと、感じます。「玉」でなくて「水」という方向には、そういった奥深さがあると思っています。

川勝 玉=ジェイドの色は緑です。命のシンボルカラーは緑なので、中国では玉を大事にしました。ジェイドは鉱物ですから、取りすぎると枯渇します。そこで陶磁器で玉の緑色を模した青磁をつくった。青磁は玉の代用品であったと思います。

日本では、平安朝の「はかなし」が鎌倉期に「無常」に変わる。また平安朝の「源氏物語」はものあわれの文学だと言われます。平安朝の「あわれ」が鎌倉期に「あっぱれ」と変わります。はかなしを無常として受け入れて諦観し、あわれを天晴れに転じたのは、いわば短調から長調への転調です。あっぱれな振る舞い、天晴れな死に際、天晴れな身の処し方と変えました。他力本願で阿弥陀浄土への救済を願う心が武士の自力本願の心が変わる。こうした情意の変化のゆきつく先が室町時代に落ち着いたと思います。そのシンボルは「花」です。1400年代に能の名人で謡曲の名作を残した世阿弥が『風姿花伝』『花伝書』を書いています。「初心忘るべからず」はそこに書かれている有名な言葉ですが、同時に、時分の花、まことの花などについても書かれています。花は咲き、散ります。人間の一生で15歳、20歳前後は美しい華やかさがある。年を重ねると花が失われるのかというと、そうでないと世阿弥は言う。若いときに美しいのは時分の花で、精進・稽古を重ねていけば老年になってもまことの花は失われない。例えば梅の花でも、若木はたくさんの花をつける。しかし、老梅は花の数は少なくともその風情はことに味わい深い。それがまことの花だという。

これは江戸期の芭蕉に受け継がれ、何によらず花のないものはだめだと『笈の小文』で明確に言っています。私は、日本の美への情意は「花」にシンボルを見出したように思います。花は水と日光が作り出す地球自然の命、緑なす植物の美しさの結晶です。人をひきつける、虫をひきつける、小鳥をひきつける、目のあるものをひきつける。花に日本人は美のシンボルを見出したのではないかと。とくに桜。花はもちろん水、太陽がなければ育ちません。花を咲かせるための必要条件としての水、水を涵養する緑、緑は生命と見ている。玉のような無常・非情のものではなく、生きとしいける草木国土悉皆成仏の命の花であり、花と散る、花のように生きる、花のような生涯を生きる。これが私は日本人の持っている美の文明の特色だと思います。花の文明です。花の文化は文明たり得る。

東洋の人生観に即して言えば、仏教では学生期、家住期、林住期、遊行期の4段階に区切ります。儒教では15にして学に志し、30にして立ち、40 惑わず、50 天命を知り、60 耳順い、70 おのれの欲するところに従って矩をこえず、女子どもは養い難しなどと論語にあります。日本はこうした東洋の人生の知恵を知ったうえで、花の命に人生観を仮託した。それが15世紀前半に生まれました。室町時代は東洋文明がほぼ入りきったときです。日本人は人生観を花に集約した、つまり芸術にした。その意味で日本は芸術の国です。美の文明への志向をもっている。すべての基は自然です。自然のシンボルは富士山。また言っちゃって(笑)、すみません。

ちなみに富士山の世界文化遺産登録は3年前2013年の6月22日、カンボジアのプノンペンで全ての委員が賛成意見を述べて全会一致で決まりました。日本の登録申請名は「富士山」でした。ユネスコ世界遺産委員会が、それでは富士山の価値がわからないので、言葉をつけ加えるように提案がありました。英語が公式言語ですが、Fujisan とだけ申請してあったところに *sacred place and source of artistic inspiration* をつけ加えるようにユネスコ委員会から提案があり、日本代表はそれを受け入れました。一介の山塊である富士山を「信仰の対象・芸術の源泉(と日本語では訳されています)」という表現にするように国際的な公式の場で外国人から言われたのです。ユネスコ委員会はイスラム教、キリスト教、仏教、ヒンズー教などさまざまな宗教の国の出身者からなります。そういう人たちが日本の国土の象徴の文化性を認めた。その場にいた私は日本が美しい国とみなされていることを実感しました。美の国日本に磨きをかけることが文化的課題だと思います。

東郷 先ほど大橋先生が言われたコンパッションに関してのお話と今の花の話を2つあわせると、何か少しわかってきたかなという感じがするのですが、最後にどうぞ。

大橋 私が最初にしゃべったから、最後は知事さんでしょう。

東郷 もう時間ですので、大橋先生で締めくくりをお願いします。

大橋 では一言だけ。川勝知事さんが世阿弥の「初心忘るるべからず」を引用されたので、蛇足をつけ加えてみます。ちょうど世阿弥の『花伝書』を、あるドイツ人と一緒に独訳しているところです。『風姿花伝』は世阿弥が父親の観阿弥の語ったことを書きとめて整理したものです。それに対して『花伝書』は、世阿弥自身が壮年老年になって、自分の芸を子孫に伝えるために書いた秘伝書です。それはすごいものです。「花」は植物の生命サイクルでいうと頂点であるだけに、そこから先に、「散る」、「枯れる」、「死ぬ」が、待っています。そういう「生死」の極点のようところが「花」です。世阿弥はそれを知っていて、いろいろ「花」について語り、『花伝書』を書きました。そのなかで語られる、「初心忘るるべからず」には、3種類あります。「芸を始めた頃の初心を忘れるな」、「芸が達者になったときも初心を忘れるな」、「老年になっても初心を忘れるな」と。特に三つ目が、すごいですね。「老後の初心、忘るべからず」。そういうことを著したときの世阿弥は、それまでの権力者の庇護を失って、不遇のどん底にいたときです。しかし、かつての「花」の時代より芸境において格

段に深まっています。そこで「老後の初心を忘れるな」と、言うわけです。つまり、権力者の庇護があるとか無いとかに影響されないところで、なおも芸に精進する心構えです。そこに「空の情意」を見ることが出来る。それは、コンパッションの深い表現だと言えます。

今、日本はある意味で欧米よりもテクノロジーが発達しているところがあって、私はいつもヨーロッパよりヨーロッパ的になったと言うんですけども、他方で依然として顔つきも含めて日本人です。それで、近代の諸制度が成熟しても、なお初心を忘れるべからず、という精神力が大事だと思うんです。現代の日本には種々の危険も迫っています。そういうときに、政治や経済での対応も大事ですが、川勝知事さんのおっしゃるような「美の自覚」、「生死の自覚」、「心の自覚」といった方向での思想が、出てくるべきだと思います。西田、西谷はそういう自覚を切り開いた人たちです。私自身も、そういう方向に「文化力」のひとつの可能領域が広がっていると思います。

基調講演者とパネラーによるディスカッション

東郷 ありがとうございます。ここで後半の最初の30分の部分を終えたいと思います。皆さん二人の竜虎に盛大な拍手を。(拍手)

それでは、このまま続いてその次の部で、中谷先生と森先生に登場していただきたいと思います。森先生が来られる前に、川勝知事、その美の国、今、まさに陣頭指揮をとってつくっておられるわけですが、静岡県の手応えはいかがでしょう。

川勝 国の進める地方創生を先取りした「“ふじのくに”づくり」に手応えを感じています。北は北海道から南は沖縄までどの地方もミニ東京を目指していません。それは東京が憧れの対象であった東京時代の終わりを告げています。それぞれの風土の力を伸ばそうとしています。日本は国の中心首都を変えてきました。一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずると『老子道德経』にありますが、三つにまで増えれば三以上の多だということです。日本は歴史的に奈良・平安・鎌倉・室町・江戸と中心を移してきました。それを地図上に落とせば、時間軸が消えて、中心地が三つ以上になります。つまり日本は多中心の国柄なので、どこもが中心になれることを意味しています。中心は東京だけではない。どこも対等で、そのような多様性の一つとして静岡県が進めているのが「“ふじのくに”づくり」です。

富士山はどこから見ても最高です。富士山の最高のビューポイントはどこでしょうか。最高の眺望場所に金メダルを与えるとしても、だれもがここが最高だと主張し、だれも譲りません。そうすると全部金メダルです。金メダルが見る人の数だけある。それは金メダルの矛盾です。富士山はそれを許

す存在です。多様性の和であり、大きな和です。大きな和を「大和」と書いて訓読みすれば「やまと」すなわち日本です。

1と2の和は3というふうにとは足すことですから、「洋間か和室か」の二者択一ではなくて、「洋間も和室も」というのが和です。「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」です。平均ではなく特殊は特殊のまま生かすのが和の精神です。そうした和の知恵を富士山から取り出せます。日本には富士の名前のつく山が400座ほどもあり、自然発生的に近江富士、薩摩富士、津軽富士、南部富士、蝦夷富士などと呼び慣わしてきました。日本はまさに富士の国です。静岡県という一地方が“ふじのくに”と自称するとき、そこには日本という全体性をはらんでいるのです。

東郷 ありがとうございます。

それでは第2部を始めたいと思います。まず森先生からご質問、感想等をお願いします。

森 お二人のすばらしいご講演を聞きまして、私はこの2人にさしあたって皆様方のかわりに代表質問するような役割を仰せつかっているのですが、余りにもすばらしいのでちょっと逃げ出しました。帰ってくるのが怖かったですけれども。

お二人のご講演の中心に西田哲学があって、しかも一番根本に無の場所という非常に難しいテーマがあります。これをお二人は「無の場所」という専門の言葉を使わないで、別の言い方で非常にやさしく、わかりやすくお話くださったと思います。

実は大橋さんが見抜いたように、この副題は確かに西田の『働くものから見るものへ』、この見るものところに「無の場所」があるのですが、僕ら専門家でもなかなか難しいわけです。僕も西田を勉強しているのですが、西田に書かなかったもう一つの幻の主著があるというのをよく言いまして、それは『働くものから見るものへ』をひっくり返して、今度は『見るものから働くものへ』という、それが西田哲学の後半、西田の言い方ですと「世界の自己表現」という難しい言い方なんです。きょうの大橋先生のあれだったら一步一步先端になるというか、そこで自分から見のじゃなくて、世界から自分を見直すというか、あるいは「無の場所」というのは我々の心の底でもあるんです。「深きおのれの奥底にすむ」とか、あるいは西田さんは「大地震の後で」というエッセーの中で、「ウロウロする必要はない。我々は自分の奥底に帰って、そこから生きて出ればいい」というんです。帰っても生きて出れないのかもしれないかもしれません。それぐらい奥底とか根底とか深い意味があるわけです。ですから、まず西田哲学はヨーロッパの伝統的なギリシア以来の主語というか、あるいは存在と言ってもいいのですが、そういう哲学に対して「無の場所」ということを突き出したわけです。これ自身が世界的に見てもやはり一つの大きな転回になっている。しかし、大きな転回の中でまた転回するわけです。それがきょうのテーマの「見るものから働くものへ」という形での転回になりました。そこを実践というか、現実を深く見ておられる知事さんの発案でこういうタイトルができたわけです。

そこで、哲学関係の人も多いので、代表しての質問なんですが、大橋先生はハイデッガーにおいて

も、西田においても世界を代表する方ですね。確かに2人はよく似ているんです。しかし、ハイデッガーにも有名な「ケーレ」というか、「転回」ということがあります。そして、西田さんにも今、言うように転回があるわけです。その場合に、ハイデッガーの場合は単に個人的な一哲学者が考え方を変えたというようなことではなくて、ヨーロッパの長い長い伝統の中での「存在の歴史」というか、大きな「命運」とも言うんですが、全体で動いていく大きな歴史の転換がここに来たのだという、そういう自覚をハイデッガーは持っていました。西田さんの場合に果たして同じようなことが言えるのかどうか。きょうのお二人はすばらしすぎてというか、大橋先生の最後の本は西田幾多郎の伝記なんですけれども、「本当の日本はこれからです」。これは西田が死ぬ間際に言った言葉なんです。本当の日本はこれからです。まさに日本に西田哲学を入れて、本当の西田哲学もこれからだという感じをお二人の講演からしました。けども、ハイデッガーと同じような大きな西田の転回、それは我々が現実世界の中の大きな転回のただ中にいるのではないかという感じがするのですけれども、そこら辺のことを少し。

もう一つだけ。レーヴットの2階と1階がありましたけれども、3.11、あるいは僕らだったらその前に神戸の大地震がありましたけれども、僕がいた芦屋やなんかでも古い家はペしゃんこになりました。1階は全部なくなって、2階しかないんですね。かろうじて2階にいた人は助かった。ということは、1階は潰れて消失しているわけです。日本のよき伝統みたいなものも、今の現代では何かそこへのアクセスというか、手がかりというか、そういうものすらなくなっているのじゃないかと、ちょっとペシミスティックなことですけども、大橋先生は技術やニヒリズムの専門家でもありますから、きょうは余りおっしゃらなかったけれども、そこら辺のことを少しお伺いしたいと思います。

大橋 森先生がご提起なさった問いは非常に大事な点です。もう一步突っ込んでいくと、西田哲学から西谷哲学に移ったときに、これがもっとはつきりしてくる、という感じがします。西田幾多郎さんは、終戦間際になって鎌倉も空爆で、食料調達も難しくなったので、周りから勧められていた疎開を決心するのですが、決心が数日おそすぎました。疎開先まで決まり、学士院から列車の切符を手配するところまで来ていたのですが、急性尿毒症で急に亡くなりました。これは川勝知事さんご専門の歴史学では、「もし」ということは語らないそうですが、「もし」西田幾多郎が1週間早く、10日早く切符を買って、疎開地に行って、きれいな空気を吸って、新鮮な食べ物を食べていれば、戦後まで生き延びたと思います。もし彼が生き延びたら、西田幾多郎さんはどう思索されたのでしょうか。あの戦争で原子爆弾が2回落とされました。一瞬にして大都市を滅ぼすテクノロジーは、西田がかつて展開した技術論では届かないものを持っています。そこはハイデッガーのほうが、深く捉えていました。そして、「ゲシュテル」(Gestell)、すなわち何もかも技術の中に絡めとられてしまって、自然だけでなく、われわれ自身も技術のテクノロジーの中に絡みとられてしまう事態を、考えています。

そこでまず、西田幾多郎が戦後まで生きていたら考えたであろうテクノロジーの問題が、われわれの課

題になります。それは後世に残された我々の宿題です。

もう一つ、3.11 に関して言うと、歴史上で一番有名な地震は 17 世紀終わりのリスボンの大地震です。これはカントの時代で、当時の知識人が衝撃を受けました。なぜかと言うと、神がつくったこの世界になぜこんな大災害が起こったの、という問いが、彼らの信仰を揺るがせたからです。神の存在理由を論ずる神義論が、根本から揺るがされました。この神学的世界観を、技術観とか自然観とかに置き換えると、少し似た事態が 3.11 で生じたと言えます。あるとき私は、ちょうど外国での滞在から一時帰国で帰ったときでした。関西空港に到着したときに、ニュースに接しましたが、あれほど凄まじいとは、そのとき思いませんでした。家に着いて、ボランティアで被災地に行こうと思ったのですが、家族から「足手まといだからやめろ」と言われて、残念ながらそういう歳かなと思って、やめました。その 3.11 を見たときに、私は、現代テクノロジーそのものが呑み込まれるような地球史的な大変動というものがあり得るなという気がしました。自然のほうがテクノロジーより大きいかなと思いました。宇宙史的には、そう言えると思います。

そういう訳で、ハイデggerのテクノロジー論も、いわゆる「大自然」との連関で「自然の中の反自然」という表現で、考えねばと思いはじめました。これについて述べる時間はありませんが、ともかくあの 3.11 は私もいろいろ考えさせられた出来事でした。

東郷 ありがとうございます。川勝知事もご意見おありになると思いますが、これまでの部分あわせて中谷先生からまずご質問、ご意見を出して、それから知事、お願いします。

中谷 改めまして中谷です。総合司会から横滑りしてきまして、頭の中が空っぽという意味の空でなければいいんですけども、質問させていただきたいと思っております。

主に川勝知事のほうへのご質問で、その中に少し大橋先生のお話も入るのかなと思っているのですが、私の質問は哲学的なものではなく、公共論や国際政治のほうに専門の人間ですから、もう少しこの現実世界のほうの生々しいお話が近いところかなと思っております。そのことで言いますと、川勝知事のお書きになったもので勉強させていただいたこと、そして今日のお話にも出てきたことなんですけれども、内陸志向の時代とそれから海洋志向の時代というのが日本史の中で入れ替わりやってくるという史観が非常におもしろく感じました。私などが申し上げるまでもないのですけれども、海のほうをもとにして陸のほうを見ていくと、まるで水の上に浮いているのが地理なわけですから、その海という地の上に図として地理が乗っていると解釈する、それがむしろ地のほうから見ている感覚があって、その意味で非常におもしろかったんですね。奈良時代、平安時代、それから江戸時代が内陸志向であって、奈良時代以前と室町、明治、これが海洋志向だというふうに分類されていたかなと思います。

私の質問というのは、単純にまず 1 つ目、そういう史観を持っておられる知事の中からごらんになって、現代というのはどっちに来ているのだろうという点なんですね。今、申し上げたようなこと

というのは、海洋の、特に中国の大変な海洋帝國的な発達がある中で、その衝撃によってヨーロッパのほうと日本のほうで同時並行的な形で、近世社会の発展があったというのが知事の捉え方だろうと思うのですけれども、それで言いますと、今は一帯一路の一路、海のシルクロードとして、中国の持つ非常に大きな潜勢力というのが出てきている時代であろうと思います。一帯一路の一帯のほうにしてみても、別にユーラシア大陸だけの大陸論だけではなくて、海のシルクロードとも深い関係があるわけですので、まさに海洋中国の姿というものが非常に大きくなってきている現況なのかなと思うわけです。

そのときに、その中国の圧力に対して、日本のほうでは例えば今、アメリカと一緒に TPP をやろうと言っていて、TPP はどう考えたって貿易額で見ると日本とアメリカが突出し、もともと緊密な関係がありますので、その中で TPP をやろうというのは何か政治的な色彩があるわけです。片やヨーロッパのほうを見ていきますと、最後の段階でイギリスがどんと AIIB に入ってきましたね。それで堰を切ったようにほかの国が参加して行って、韓国なんかも入りまして、台湾なんかも入っているという格好になっているわけです。要するに中国を真ん中にして、日本とヨーロッパのほうにいろんな影響が及んでいるのが今の時代なんだろう。ではこのときの日本は、今、我々は TPP もやっているんだけれども、果たして内向きになっているんだろうか、それともグローバル化に進んでいるんだろうか、これが1点目の質問です。

2つ目なんですけれども、ではその中でどういうふうには日本は考えていったらいいんだろうということについて、これは私なりの意見です。実はここに学長もいらっしゃっているんですけれども、この京都産業大学で、今、申し上げたようなことも考えつつ、公共論の専門家としてもグローバルという実践的な活動も立ち上げています。これは言うまでもなくグローバルとローカルを足して2で割った用語ということになっているのですが、なぜこんなことをやっているかということ、一言で言いますと、ナショナルなものかグローバルなものかだけで考えていくと、非常に衝突しやすい。グローバル人材も結構なんですけれども、グローバルかナショナルかという言葉は対立を呼び込みやすい面があるんじゃないかなと思うんです。例えばなんですけれども、中国人対日本人という言い方はよく言われます。ところが、上海人对京都人では対立にはならないんです。ローカルとローカルでは対立は起きないんです。ネーション同士だとそういうことが起こってしまう。そこで考えていくと、グローバル化時代にはむしろローカルに可能性があるのかなと思っています。ローカルのアイデンティティをきちんと磨いていくと、健全なパトリオティズムとなり、それをもとに世界の人とつきあう道も開けてくるのだろう、と。地域外交をやっているらっしゃる知事でいらっしゃるので、そうしたグローバルの考え方をどう捉えておられるのかなということをお聞きしたかったのです。

このことは、大橋先生のほうに少しコメントというか、質問というか、そこにも絡んでくることなんですけれども、こうしたあり方というのはネーション対ネーションではなくて、ローカルとローカ

ルで考えていくともう少しやわらかな形が見えてくる。このやわらかな普遍性ということを見出したいなと思ってこういうシンポをやっているわけですが、そこで考えていくと、例えば大橋先生が著書で書いていらした「日本的なもの、ヨーロッパ的なもの」、漢字の話ですね。漢字は例えば色の「青」とか、動くの「動」とかで見たときに、形容詞とか名詞とかの区別はないのだと書いていらして、「青」というと「青い」なのか「青」という名詞なのかよくわからないけれども、それが日本の漢字のあり方なのだ、と。そうしたところで考えていくと、存在を客観視していく、客体化していくような、そういう西洋的な言語構造に絡めとられた思考方法だけではなくて、もう少しやわらかな動きからの捉え方というのですか、そういうものができるのではないかとおっしゃっていた記憶があります。それで言いますと、漢字を使うのは日本と中国しかないんです。韓国はやめてしまいました。ほかの国でもほぼ中国系の人を除いたら使ってないだろうと思います。この間、上海へ行って帰ってきたところなんですけれども、本当にそういうローカル同士でつき合っていると、同じ漢字の親しみもあって、目から飛び込んでくる漢字の情報量に助けられるわけです。こんな近さでつき合える国もないのではないかなという感覚も一方で持っているわけです。このことも含めて、グローバルの可能性をどうお考えになるかということも含めて、お伺いしたいと思います。

以上です。

川勝 中谷先生は質問の中で答えを出されており、先生の現状認識に賛成です。

御指摘のとおり明治以後の日本は海洋志向です。アジアは大陸アジアと海洋アジアに分けて見るべきであり、日本は大陸アジアと一線を画した海洋アジアの一員として自己認識するべきであるというのは私の「文明の海洋史観」のテーゼの一つです。大陸と海洋では場の持つ性格が異なります。大陸という場は領土・領有の所有権にとらわれがちですが、海洋という場は本来的に無主でありコモンズです。私的所有という「有」のしがらみから「本来無一物」かつ「無尽蔵」の本来的自由の場が海です。しかし現状は所有・領有という陸地的志向が海洋を汚染しています。

TPPはトランス・パシフィック・パートナーシップで、太平洋を共同のコモンズにしようという理念が底にあります。今は貿易の利害が表面に出ていますが、めざす目標は太平洋をコモンズにすることでなければなりません。コモンズ思想を共有しやすいのは、陸地の大国よりも、海に浮かぶ島国です。

陸地はもとより、海洋についても国際政治の最大の問題は国際紛争や戦争です。紛争や戦争をいかに回避するかが、国民の代表である国家の役割ではないでしょうか。近世以前の戦争はルールなしでやっていました。17世紀に同じキリスト教圏同士で新教と旧教で争う三十年戦争があり、そのことに苦悩したグロチウスが『戦争と平和の法』で処方箋を出し、それに基づいて国際法と主権国家体制ができました。1648年のことです。課題はいかに戦争をしないかということで、それが底流にあります。イスラム圏でも「戦争の家（ダル・アル・ハルブ）」と「平和の家（ダル・アル・イスラム）」

の二分法の世界観をもっており、平和に価値をおいています。海は無主なので海賊行為をやめようというところで海洋法ができましたが、主権国家体制が全世界に広まり、主権の及ぶところは領土・領海になり、海洋法が国連で採用されたとき「排他的経済水域」の概念が出され、本来無主の海を排他的に自国の海だと主張するという陸地的発想、領土的発想の延長で海をみることになり、このような法意識が争いを生んでいます。所有権の克服、それが争いの種をなくす最大の課題ではないですか。

ところで、今回のシンポジウムの世話をしている本学の博士課程の中岡君と先ほど話しましたら、ユネスコの研究をされている。国際紛争の処理を平和的にすることが国連の1945年10月に採用された国連憲章の理念で、どうしたら紛争をなくせるかということで、翌46年ロンドンで、教育・文化・科学が大事だということで、パリに本部を置いたユネスコができました。この一連の流れにあるのは戦争をなくそうという目的意識です。歴史的にはだんだんとその目的意識は広まってきているのでグローバルな共通意識になってきたのではないかと。ただ、まだ主権国家が幅をきかせており、主権を操る国家政府が何事も決めている感が強く、習近平主席と安倍首相、あるいは安倍首相と朴槿恵大統領との言い争いを、中国人全体と日本人全体、韓国人全体と日本人全体の対立のように見るのは、先生がおっしゃるように、誤りです。

もともと外交は国王の専権でした。国王のいないアメリカは大統領が外交をすることになったのですが、実務はセクレタリー・オブ・ステート、つまり国の秘書がやる。かつて国王の秘書がやっていたのでその名がつけました。国王が領土防衛のためにする戦争だけはよろしいというのが国際法の戦争のルールで、なるべく戦争をしないために国王は外交をしたのです。ところが、フランス革命で国王を廃して以後、ネーションステート国民国家ができて、国民主権がうたわれ、その集合の国際連合ができました。国民の代表が国王のように振舞っているのが問題です。

しかし、新しい動きもあります。20世紀末ごろから、例えば京都はパリと姉妹関係を結んでいますが、日本にある1,700ぐらいの市町村は、47都道府県を含めて、どこも外国の自治体と姉妹関係を持っています。1970~80年代から雨後の竹の子のように地方政府間の関係が世界的に広まってきました。その結果、ユナイテッドネーションズUNのほかに、ユナイテッドシティーズ&ローカルガバメンツ頭文字のUCLGが世界組織にまで発展しています。UCLGはUNを補完、いや、とってかわる勢いさえもっています。つまり国王から国民の代表へ、そして現代では地方政府や民間へと、だんだんと国を超えた外交関係もローカルなレベルにおいてきています。

尖閣諸島も実際の死活問題は沖縄と台湾と近くの中国の漁民です。もちろん軍事的な思惑もありますが、基本的に漁業の利害関係が中身です。国民全体がその犠牲になるような筋のものではない。竹島も同じで、ローカルな関係が極めて重要です。私どもは地域外交をすすめています。時には国も相手です。例えばモンゴルで、人口が300万。静岡県は370万。日本政府が動いてくれないので、モンゴル政府は静岡県と、この一、二年、東郷先生のアドバイスも受けながら関係を急速に深めています。

モンゴル国政府の産業省、農牧業省、保健・スポーツ省、教育・文化・科学省などの政府機関と静岡県は対等に覚書を結んでいます。私は当初は地方政府が国家を相手にすることを懸念し、日本政府（外務省）にお尋ねしたら、日本政府は腰が重くて動けないので、やってよいという。国と自治体という非対称の関係です。もちろん例えば韓国の忠清南道、中国の浙江省など静岡県は地方政府同士でもやっています。しかし、もはや国家同士の関係ではないということです。大事なのは人間が互いに殺し合わないことで、そのためには友達、場合によっては結婚してお互いにどっちかの国に住んでいるとなれば、友達や家族がいる国とは喧嘩できないという抑止力が働きます。力による抑止力ではなくて、愛情による抑止力です。今、先生方がなさっておられるグローバル、ローカルを2つにしたグローバルな活動が極めて重要だと思います。だれもが外交をできる。その哲学も富士山からきています。富士は不二（オンリーワン）とも書きます。誰1人、どれもがかけがえがない。首相だけでなく、主権在民で一人一人が主権者なのでローカルなレベルでも平和づくりをしてよい時代になっており、中谷先生に期待しています。

東郷 ほとんど時間がなくなってきておりますが、議長としてどうしてもこれだけはお二人に伺いたいのですが、全ての点について異論がないのですけれども、他方、まさに今、川勝知事がおっしゃったように、現実の日中関係に関して言いますと、やはり中国のほうにネーションステートとしての力による覇権というものが色濃く表に出ていると思います。それを迂回するというか、それではだめなんだということで、今、私たちはすばらしい具体的なビジョンを話したのですが、現実の中国でネーションステートのために頑張ろうとしている海軍軍人とか、それを支えている党官僚と話をしているときに、こういう話を私も可能な限り出してみます。本当に喜んで、耳を傾けてくれます。しかし、だからといって彼らの行動がすぐ影響を受けるわけではありません。私たちのようなメッセージを現実のネーションステートでやってきている人たちに対して、やはりそれではだめなんだということをもうちょっとストレートに言う、彼らを動かすような知恵なり文明史観なり哲学なりの言葉というのはありますでしょうか。もしあれば、もう時間もないので簡潔に教えていただければありがたいのですけれども。

大橋 ネーションとネーションの対立はハードな、堅い対立です。やわらかい普遍性というお話を先ほど伺いまして、この言葉は私自身も使ったことがございます。どういう意味かと言いますと、例えて言えば、ゴムとか豆腐とかのように、均一なんだけど、どの部分もフレキシブルである。ハードウェアでなくてソフトウェアである。「ハード」の部分は世界中どこでもおなじ普遍的なものですが、「ソフト」の部分は国民性に合う、経済事情に合う、生活事情に合う。感性的な方向で需要に応じて造られる部分です。ドイツで長く暮らすと、自動改札切符がでかいことに、感心します。日本だと小さな機械で、トントンとボタンを押すと、欲するものが出てきて、まず全てうまくいく。ところがドイツでは、でっかいばかりでなく、しょっちゅう故障することに感心します（笑）。テクノロジーは

「軽薄短小」のものが、高性能で、重厚長大は未発達の証です。日本人はそのポジティブな意味の軽薄短小のソフトで、優秀だと思います。

その根本に美意識があると私は思うんです。東郷先生もおっしゃるように、「力」でグリグリと覇権主義的に国を拡張していくという方向とは違うものが、そこにあると思います。問題は、その種の力に対して、美的な力がどう対峙するかです。現実はどうすればいいかというのは、政治家にして学者の川勝知事さんにお任せするとして、基本的な考えとしては、この美的な文化力の涵養と発信に尽きると思います。先ほど控え室で知事さんにこんなことを申し上げました。ドイツにも、中国からたくさんの哲学留学生が来ています。日本の留学生の10倍ぐらいです。哲学の分野でも、そうです。その場合、西洋哲学を受け入れる根本姿勢として、「西洋にアリストテレスがいるなら、こちらには孔子がいる」といった意識が、たいへん強いという感じがします。新儒教というのがあります。正直のところ、哲学思想としてインパクトを持つとは思えません。他方で日本人留学生の場合は、まずは自分をなくして相手から学ぶ姿勢が、共通しています。もっともそのかわり、独自のものを展開するという姿勢は稀薄となります。文化力の涵養と発信という観点では、それも問題となるかと思います。世界の諸潮流に接して、虚心にこれを理解して受け入れるということと、自分自身の中から何かを産み出して発信するということとは、本来は車の両輪なので、それは日本の近代化・ヨーロッパ化そのものが持っていた課題が、今もつづいている、ということかと思う次第です。

東郷 ありがとうございます。

それでは、時間の関係がありますので、後半の第2部をここで終了させていただきたいと思います。両巨頭に盛大な拍手をお願いします。(拍手)

最後に後半の第3部ということで、中谷先生お願いします。

会場とのディスカッション

中谷 それでは、再びこちらに戻ってまいりました。ここから時間が押してきているということはあるのですけれども、せっかく質問をたくさんいただいておりますし、それに従ってフロアの皆さんからいただいたご質問をパネリストの方々に、特に大橋先生、川勝知事に投げかけていきたいというふうに思っております。時間の関係で、一つ一つ端的に答えいただければと存じます。

まず1つ目の質問なんですが、全員に質問いただいているのですけれども、これは大橋先生、それから川勝知事に短くお答えいただければと思います。質問内容は、日本の独自性というものはあるのかということで、これは日本の普遍性を問うというシンポジウムの裏返しのような質問になっており

ますので、まずこの点から、日本の独自性というものは果たしてあるのか。大橋先生、川勝知事の順番でお願いできますでしょうか。

大橋 どの分野でのことか、ということもありますが、顔つき、骨格から、性格、等を総合した「日本的なもの」が、「ドイツ的」「フランス的」「中国的」等といったものと比べて、ずいぶん独自だと思います。私が最初にドイツに行ったときに経験したのですが、日本という国はヨーロッパから見て、地勢的にも歴史的にも文化的・言語的にも、本当に独自だと思いました。日本にいたら日本ってどういう国、日本文化ってどういうものと考えたことはないですけども、ドイツへ行ったらいかにも独自だということに、気づきます。その独自性をどうあらわすかということですが、これについては川勝知事さんがいわば現場で活躍なさっておられると思うので、お任せします。

川勝 河合隼雄という文化庁長官を務めた方が、宗教色の強い国への入国管理で「あなたの宗教は何か」と問われて「無宗教だ」と答えたところ「無宗教とは何事か」とすごまれたので、河合さんはとっさに「無の宗教」だと言いかえて「無」について弁じ立てた。相手は感心して事なきをえたとのこと。河合流の独自性の発露です。

無は有に対する無ですが、ヨーロッパ哲学を有の哲学と捉えれば、「無の宗教」ないし「無の哲学」はそれを相対化する力を持っています。それは日本の独自性です。欧米の哲学を「有の哲学」と捉えた上で出されたのが「無の哲学」だと思います。その源はどこにあるのか。日本思想に潜在していたと思います。そこに西洋の有の哲学が渡来し、対峙を迫られた。有と対峙しながら自覚的に体系化され、有無の対立を弁証法的にアウフヘーベンしたのが西田幾多郎先生の「無の哲学」だと思います。そこに独自性があり、日本的でありながら西洋の有の哲学を包摂しています。先ほど大橋先生がおっしゃったように、相手の土俵に乗って、相手を克服し超えた。それは免疫のメカニズムに似ています。病原菌が襲ってくると体内に抗体が出来て体は免疫になりますが、抗体は外から抗原が襲ってこないが発現しない性格をもっています。抗体は潜在しているのです。外来の哲学が渡来したことで日本に潜在していた無の思想が顕在化し、無の哲学として体系化されたというように見えています。

では日本でなぜそれができたのでしょうか。これはきわめて興味深いテーマです。私は、日本の6・7世紀の飛鳥時代から8世紀の奈良時代にかけて、ユーラシアの文明遺産のほぼすべてが日本に渡来していたことが大きいと見ています。その一つの物的証拠は正倉院の1万点以上の御物です。そこにあるのは中国・朝鮮はもとよりギリシャ・ローマ、バルシャ、インドなど陸と海のシルクロードを通して日本列島に渡来した文物です。当時のヨーロッパはアルプス以北がまだ未開状態で地中海が栄えていたのですが、地中海以東の文物が渡来したとき、それをになっていた外国人も一緒に来日したのではないのでしょうか。とすれば、飛鳥・奈良はユーラシアの諸文明が期せずして出会う諸文明の坩堝のような状態でもつ場になっていたといえます。そこにやがて日本文明が普遍性を獲得する種がまかれたといえます。種はまかれたまま水もまかれず大地で眠っていたのが、外来からの新

しい刺激で根をはやし芽を出したということではないかと思えます。飛鳥・奈良はユーラシアに栄えた諸文明の移動の東端のターミナルでした。諸文明のごみ捨て場と言ってもいいのですが、表現はどちらでもよく、そこに即自態とはいえ世界性があったことが重要で、それが時の流れの中で対峙化されてついに普遍性の高みに達した。その始源が飛鳥・奈良にあったとみています。

ほかの例証として「天皇」の称号と「日本」の国号があります。「天皇」の称号の原型は北極大帝であると諸橋轍次の「大漢和辞典」にあります。北極星は天を統べる神とみなされた星です。「日本」の国号の元にあるのは言うまでもなく天照らす日の本の太陽です。太陽を大事にするのは農耕民であり、北極星を大事にするのは遊牧民です。北極星は光が強くないので位置がちょっと目にははっきりしませんから、北斗七星をたよりにして見つけます。方角を知らないと砂漠では道に迷います。遊牧民の最高神が北極星で、農耕民の最高神は太陽です。それぞれが「天皇」の称号と「日本」という国号になった。ユーラシアの牧畜文明と農耕文明の双方の核心がとりこまれているということです。天皇の称号、日本の国号の成立は7世紀末から8世紀初めで、その直後に奈良時代に入ります。そのころまでにユーラシア諸文明が渡来していたと見られます。それはユーラシアの東端に浮かぶ日本列島の独自性です。同時に日本文明の普遍性を正当づける歴史的根拠です。

こうした観点にたつと、現代の日本文明には使命的役割があると言えるのではないのでしょうか。かつてユーラシアの人類の生んだ広域にわたる諸文明の資産の恩恵をこうむったのです。今度は恩返しする番だからです。その理念は何か。鍵は富士山です。「富士」にはオンリーワンの「不二」という字も当てられました。霊峰は人類の共有財産としてユネスコで満場一致で世界遺産に登録され、ローカルで駿河にしかない不二の固有の存在が普遍性を獲得しました。富士山を最初に表現した歌は「天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き駿河なる 不尽の高嶺を 天の原振りさけ見れば 渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり 時じくぞ雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ 行かむ不尽の高嶺は」という山部赤人の長歌ですが、まさに天地が別れたときから日本人にとって神の如き存在でした。同じ万葉集で高橋虫麻呂は「日の本の 大和の国の 鎮めとも います神かも 宝ともなれる 山かも 駿河なる 富士の高嶺」と詠いあげています。富士山が世界の宝になったということは、不二なる存在が普遍性を獲得したということです。日本にとっての富士山がそうであるように、それぞれの国で大事にされているものがあり、そのどれをも大切にするというメッセージをそこからくみ取ることができます。冒頭で学長のお話にありましたように、多様性が重要です。多様性といえば静的な印象ですが、実態は動的です。今日の世界は多様化してきた帰結です。多様化は現在進行形です。同じ人は古今にわたって存在しない。同じ人が生まれてこない。一人一人、一つ一つがかけがえのない存在であり、多様性の尊重が日本のこれからの指針になっていい。どの地域も固有性を誇っていい。どこも中心の一つ、多中心の一つであり、いわば円の中で球形の表面のどこが中心か、どこも中心になり得ます。まさに多即一の哲学です。

それからもう一つ、花について大橋先生が触れられましたが、一つ付け加えます。花には緑の葉があります。緑は花の存在条件です。「松に古今の色なし」という句があり、松は永遠の緑をたたえています。実際は松も葉を落としますが、常に常若です。伊勢神宮の遷宮が示すように再生して生き続ける常若の思想があります。花の命も常若の命も大切にします。それを象徴するのが松・竹・梅、そして桜。「竹に上下の節あり」の句の意味は節目を大事にして成長すべしということで、節目の50年の研究所の設立は祝わないといけない。「梅に春の香りあり」の句は季節の移り変わりという循環の思想の表明です。締めが花で「桜に花の命あり」といわれます。松・竹・梅・桜と日本の思想は自然に仮託され、自然に由来しています。これこそ西田幾多郎の「物となって見、物となって働く」という哲学の意味するところでしょう。自己と物自体との区別がなく人物として一体で、山川草木国土ごとく己と一体ないし対等とみる思想です。これは先ほどのハイデッガーのテクノロジーで自然を征服するという思想の根本にある「旧約聖書」以来の「産めよ、ふやせよ、地に満てよ、世界を治めよ」という人間中心主義の思想とは一線を画するものです。山川草木国土悉皆成仏という思想、これは地球社会に発信し得る哲学だと思います。

中谷 ありがとうございます。文化論から、道教から、エバーグリーンから、常若から、いろいろなものが出てまいりましたが、なるべくそうしたこともつながる形で質問を拾いたいと思います。そうした形で日本の独自性が見られるということを今、伺いました。今度、翻つてもう一度このシンポジウムの原点の普遍性のほうに戻りますが、こんな質問です。茶道をやっている方から非常に具体的な質問なのですが、茶の湯の中で大切な要素の一つである炭が使えない者も多くなってきた。この炭のつくり手も減っている。そうすると、自然にこうしたものも残していけなくなってくる。風景一つ見ても殺風景なビルが並んできている。こういうことに取り囲まれている中で、これから先、本当に日本の普遍性なるものはちゃんとあり続けることができるのかというご質問です。また、別の方からの似たご質問なんですけれども、今後、若い日本人たちが守っていくべき日本の美学があるとしたらどういうことになるのか。この2つリンクしていますので、もう一度大橋先生、そして川勝知事へと投げたいと思います。いかがでしょうか。

大橋 信楽焼ってありますよね。あそこのある作家を昔から知っています。彼は苦勞して、古代の陶器の焼き方を復元することに成功しました。その人が言うのに、電気釜は便利だが、自分は伝統的な登窯を使う。電気釜は自由自在に温度も調節できるが、「火」がもつ力をむしろ損なってしまう。私は専門外だから分かりませんが、登窯の「火」でないとできない色合いがあるのだそうです。登窯から作品を取り出す瞬間が、あるそうです。その瞬間まで、作品がどう出来上がったかは、分からないというのです。そういえば、茶道でも釜を使わずに、電気でお湯を沸かすという時代だと思いますが、お湯がしゅんしゅんと湧くときの「松風の音」の自然性などは、そこでは出てこないだろうと思います。ハイデッガーの言葉で言えば、技術が発達すればするほど、自然開発はすすむが、自然

の自然性が根こそぎにされる。それによって、自分の内側からも、何かが根こそぎにされかねなくなる。そういう危機感は、今日では多くの人を持っているんじゃないでしょうか。

若い人にとって、それがどう展開されるかですが、一つだけ申し上げるなら、私はある種の楽観論をもっています。私は孫が3人いるんですけども、私は家内に、「この孫たちが大きくなった時は時代が危ない」と、よく言います。どこかで何か起こるよと言っているんです。それは、本気でそう思っています。しかし他方で、若い世代は若い世代の感受性を必ず持っている、とも思っています。危機というのは、自分で気づくほか、ありません。そして必ず気づくと思います。そういう意味で、私は危機感の裏返しの楽観的な見方をします。

川勝 若い人は東京に憧れますね。僕は京都に生まれ育ちました。格子戸の町家が京都の古くからの佇まいですが、小学生のとき、東京から引っ越してきた転校生が当時の京都では珍しいマンションに住んでいました。玄関はドアで台所にはテーブルと椅子、朝食はトースト、バター、紅茶だと聞いて、そのハイカラさに仰天し、ご飯とみそ汁の京都の子どもは「さすが東京はすごいな」と憧れました。当時の三橋美智也さんの歌謡曲に「トンビがぐるりと輪を描いたホーイノホイ、そこから東京が見えるかい、見えたらここまで下りてきな♪」(笑)、みな、東京を見たがり、憧れたのです。しかし、現実の東京は殺風景なビルディングフォレストで借景もない。これはどこかおかしいという危機感があるのが救いです。景観条例が各市町で導入されていますが、緑を大事にしようということで共通しています。家屋と庭を一体にするのは「庭屋一如」と言われるそうですが、もともと家庭とある。ホーム・スイート・ホームのホームに庭の意味はありません。ホームを漢字にすれば家庭で家と庭が一体です。そこに日本独自の暮らしの文化があります。縁側に腰かけて、梅の花がほころんできたとか、柿が色づいてきたとか、そういう感性を家と庭の一体性のなかでつちかってきた。集合住宅をつくるにしても、菜園を持たせるなど少しずつ緑への回帰が広がっています。

日本人はモラトリアムと言ったら悪いけれども青年時代が長くなっています。青年会議所が40歳まで、商工会議所の青年部は45歳以下ですから45歳以下はみな青年です。そこからようやく壮年に入る。平均寿命は日本の男女ともに80歳以上です。しかし65歳になると高齢者扱いです。65歳をもって高齢者だと誰が言ったのか、厚生労働省です。厚生労働省は何を基準にしたか、もとはWHO世界保健機構が昭和31年、1956年に65歳をもって高齢者にしたのです。当時の日本の平均寿命がそのくらいなので厚生省は65歳をもって高齢者にした。ところが、それから60年経過し、現在の日本人の平均寿命は80歳以上です。もう一つ健康寿命というのがあります。日常生活に支障を来さない高齢者のことです。これが日本は世界一です。女性76歳。76歳までピンピンしている。そこまでは壮年です。75で後期高齢者とはひどい表現です。そんな言葉は日本語からは取っ払うべきです。ともあれ、46から76までは壮年で、前期(46～55)中期(56～65)熟期(66～76)、76までは壮年です。青年は45歳までずっと大志を抱き続けてください。壮年熟期が大事な存在ですが、今は60

前後で引退してすることがなくて困る人もいるようですが、76歳まで壮年で働けます。77歳になれば喜寿を祝い、自己をいたわり、80代で中老、88で米寿、90代で長老です。長老はえらい存在なのです。社会保障費の負担で高齢者を社会の邪魔者扱いにする日本の政府から、皆さん自立しましょう。静岡県は“ふじのくに”づくりで独立宣言もしています。ちょっと脱線しましたが、要するに、日本の健康寿命は世界中の憧れであり、それは誇れるのです。

先ほど駅の切符の話がされました。外国はでかく、日本は小さいですがきれいです。ちなみに農業がおくれていると言いますが、ドイツのイチゴはトゲで舌が切れたりするとか。日本のイチゴは紅ほっぺ、とちおとめ、あまおうなどイチゴの芸術品です。民芸品とか工芸品という言葉があります。これは日本海側の方たちが雪にとどされる冬に副業として一生懸命すばらしい漆器だとかを作り民芸品とか工芸品となっています。その人たちは春になると、農作業をする。同じ人の手で作られた農産物は世界の同じ農産物と較べれば、稲にしてもそうですが、芸術的です。私はこれを農業芸術品、縮めて「農芸品」と呼んでいます。日本の農作物はことごとく農芸品なのです。北海道でなぜ米ができるのか、亜寒帯ですからもともとはできなかった。岩手の宮沢賢治さんは、寒い夏はおろおろ歩きとって肥料のことなどで心配しているうちに病気になるって死んだ。ところが戦後、青森の津軽平野がコメどころになり、今や石狩平野がそうです。品種改良して、コシヒカリよりもおいしい米が北海道でできる。品種改良、土壌改良して、日照時間が短くてもおいしいコメ、コメの芸術品です。ベトナムあたりに行くと、まだ穂づみです。稲の高さが違うから、穂でつまざるを得ない。日本では根刈りは平安時代からです。品種改良してやってきた。日本の農作物は芸術品、農芸品です。

ですから、一次産業はこれからがチャンスです。神戸ビーフだけではない。全て一次産業の産物は芸術的で、技術を芸術に高める国が日本です。美的感覚は青年の多感なときにしっかり身につけて、フロンティアはコンピュータかもしれませんけれども、私は大地にあると思います。中山間地域、里山にある。これまでは沿岸部で原料を輸入して、その場で加工し輸出すれば効率的なので臨海工業地帯がつけられました。今は新興国に追い上げられています。これからのフロンティアはむしろ内陸の林業、農業にあると思います。

実際、日本の農業を見て海外の青年はびっくりする。最近の日本人は欧米への留学の時代も山を越しましたが、青年海外協力隊、大体平均年齢は二十七、八歳で、貧しい諸国にボランティアで行っているというけれども、実際はそこで学ぶことのほうが多いのです。向こうの人たちは日本に憧れている。そういう人たちをもっと招けばいい。日本に憧れている青年を入れるべきだ、労働者としてではなく、日本に憧れている青年の教育に金を使うのがいい。それがユネスコの基本的な考え方です。ユネスコは戦争しないように教育と科学と文化を推進している。学問文化を通してしか本当の平和はつくれません。文化力を人類に還元しようというのが国際的な申し合わせです。文化の基礎は土を耕すことです。それがカルチャーの原義です。文化はもともと人間が大地に手を加えることを意味しまし

た。大地の生む農産物が芸術性を持っているのですから、日本の大地も芸術的だと思います。日本列島が芸術であり、手を入れていないところは借景として庭とみなす文化があるので、全体が借景つまり庭であり、日本列島はガーデンアイランズです。ガーデンアイランズ日本を皆さん楽しみにいらっしゃいといえるほどに文化力を磨けばよい。緑の中に美しさがある。それを知ろうと思ったら、禅寺に行けばいい。特に静岡の臨濟寺がいい。ここにご臨席の老師がいいし、庭がすごくきれいです。

中谷 ありがとうございます。何かお話を聞いていますといいのは、どんどん元気になってくる感じがありますので、大変うれしいことかと思っています。

時間のコントロールをしなければいけないのですけれども、ちょっと変則なんですけど、こういうふうにいたします。この後、東郷先生のほうにお願いをして総括に入っていたのですが、その中で大橋先生のほうにもう一つ実はフロアからの質問が来ていましたので、恐らく東郷先生から大橋先生のほうに振られて最後のコメントを求められると思いますので、その中にこの質問への答えも入れていただければと思います。大橋先生の基調講演のときに、日本文化の中の美的特質について説明をされて、西洋というのは完成を美と見る。それに対して東洋というのは完成をもう一步突き破るんだというお話をされた。ここについてのご質問なんですけれども、結局それは何なのかということですね。つまり東洋の美というのは完成というものを突き破っていくというときに、その突き破り方というのは西洋のように一旦完成に近いものをどんどん目指して行って、最終的にそこから脱していくという意味なのか、あるいは初めから別のほうの完成を目指しているのか、そういうことを教えていただきたいというご質問でした。多分日本の美的感性にかかることかなと思いますので、そのことも最後に触れていただければと思います。

それから、実は同じようなことを川勝知事のほうにもご用意していたのですが、実はお話の中でもうお答えになっておられました。といいますのは、日本の若い方たちに今後どういうふうな教育を求めていくのか、そして日本の価値観をどういうふうに発信していけばいいのかというご質問だったんですけれども、基本的にそうしたことにかかわるお答えがあったと思いますので、むしろ川勝知事のほうには東郷先生が自由に振られる中で、また最後に一言いただければと思っています。

ということで、私のほうのこの場での司会はここで終わって、統括のほうを東郷先生のほうにお譲りしたいと思います。

東郷 それでは、これで第3部を終わりましたので、またここで両巨頭に盛大な拍手をお願いします。(拍手)

それでは、終了予定まであと5分しかないので、若干延長させていただきます、これで最後の総括に入りたいと思います。

まず大橋先生、それから川勝先生の順番で、最後に一言、きょうの議論を通じまして、多分まだまだ話し足りていない、言いたいことは山のようにあると思いますが、そのところは絞っていただい

て、最後に一言お1人ずつご発言をお願いします。大橋先生、どうぞ。

大橋 「終わり」というのは、西洋的理解で言うと「完成」です。しかし、その完成をもう一回突き破るという知恵が東洋にあります。西洋流に言うと、完成の形態は円形になります。しかし、この会場には茶道の方がいらっしやると、先ほど聞きました。茶道では、完璧な円形の茶碗なんて、あまり面白いとは見なされないでしょう。茶碗は左右同形でなくて、美的に歪んでます。ヨーロッパでも、歪んだ形を尊重する流れとしてマニエリスムなどがありますが、ルネサンスの左右シンメトリーを少し歪めて、円形曲線を強調するわけで、そこからバロックというのが出てきて、さらに変形をすすめてマニエリスムが出てきます。しかしそれは、あまり「気品」が無いのです。ドイツ語の「美」(シェーン)というのは、概念からしても「輝く」(シャイネン)という語から来ています。輝く、きれい、化粧、仮象、等々という方向が「美」です。しかし日本美には、その輝きをそぎ落とした「寂び」や「侘び」という概念があります。美の完成態を突き抜けたところですよ。完成形態を破る。どこまでも破る。そこに、外面的な美の輝きを内面性へと転ずる方向があります。私自身は、今日の締めくくりを、「終わり」でなくて「始め」にする、という気持ちがあります。それが私のきょうの感想でございます。(拍手)

川勝 節目は終わりであり始まりですね。そこには常に原点に還るところがあり「初心忘るべからず」に通じます。原点返りは年齢では還暦です。続く60年はそれまでと同じ60年にならない。レボリューションにも似た意味があると思います。リボルブは再回転ですが、同じ形を描かない。未来を見るのに歴史を振り返れといわれます。振り返れば未来です。振り返る先の原点をどこに求めるかはそれぞれです。50年前であったり、明治維新、江戸期、縄文・弥生であったりする。場合によっては生命の起源から見る人もいます。いずれにせよ、今を節目とみなして原点に帰り過去を全部今にとりこむことが未来を構想する根本姿勢だと思います。

最後に、京都産業大学の「むすびわざホール」について、大城学長先生からさっきお聞きしたばかりですが、産業の産は「むす」、業は「わざ」と読むとご説明いただきました。産業を「インダストリー」の訳ではなく、当初から「むすびわざ」だと言われて、感心しました。その原点はどこまで遡るのか、「古事記」ではないですか。というのも「古事記」の冒頭の一文は「天地の初めて開けしとき、高天原になれる神の名は天御中主神」とあり、続いて高産巢日神、神産巢日神が生まれます。高く産(む)す、神を産(む)す、とあるのです。「むす」は古事記の最初の文章に出てくるのです。業(わざ)を美的に洗練し芸術に高める行為だと解釈すれば、産業(むすびわざ)大学の使命は大きいと言わざるを得ません。日の本を産み、人を産み、世界を美しく創る業を磨けということでしょう。

西洋のキリスト教で説くのは死からの再生です。キリストは死んで後に復活し、千年王国では神が劫火で人々を焼き殺し、死者の復活です。日本の場合は、現し身のまま禊をし、生まれたままの清らかな心身にもどったとみなし、初心に帰って現世で再生する常若の思想です。本学の「むすびわざ」

にはその言霊が宿っています。創立 50 年がたちました。半世紀前の私はまだ京都にいて高校生でした。京産大という新しい大学ができたと聞いたのが昨日のように思い出されますが、今や附属高校・中学もあり、学部も 8 学部にもなって発展しており、これからの 50 年が楽しみです。“ふじのくに” 静岡からご発展を見守り注目してまいりたいと思う次第でございます。(拍手)

閉会の挨拶

世界問題研究所長 東郷和彦

東郷 両巨頭、本当にありがとうございました。

冒頭に申し上げましたように、このシンポジウムを開催することができたことは本当に私にとって感無量でございます。きょうは本当にさまざまなお話を伺うことができました。あえて私の頭の中に生まれたポイントというのを申し上げれば、やはり日本という国、日本という国柄は世界のあらゆるものを自然に受け入れてきた。受け入れてきて、それを日本の中でそれなりにいろんな形でこなして、今、ようやく江戸期を経て、明治から太平洋戦争を経て、戦後70年たったところで日本が憧れる国から憧れられる国に、日本が発信する国に来ている。非常に重要な地点にいるということをお二人のお話から強く感じました。川勝知事の言われた花、大橋先生の言われた悲、コンパッション、あえて申し上げるならこの2つでほとんど全てのことが尽きる、そういう新しい発信の地点にいるというふうを感じさせていただきました。

私が自分で悩んできている国際政治との関係で申し上げますと、最後に大橋先生が言われた中国の学生たちは哲学の勉強をやりてドイツに来て、それでアリストテレスといえば自分たちは孔子がいるとすぐ反論する。しかし、日本の学生は違う。日本の学生はものを考えていないわけではなくて、まずドイツに行ったときにはドイツの哲学というものは何かということ素直に受け入れる力がある。それが今、両先生がおっしゃったような日本からの新しい発信の力になってきてきている。これは外交という面で本当に重要な示唆をいただきました。つまり外交のエッセンスは何かというと、外交という仕事をしてきた者としても、まず人の話を聞くことでもあります。まず人の話を聞いて、自分の意見と違い、自分の国益と全く違ったものであっても、まず聞いた上で相手の立場ということを理解するということが出発点であります。ところが、力と力が激突して、相手のやっていることが日本の国益でないということになりますと、どうしても力が出てきます。力が台頭してきます。しかし外交は、大橋先生がおっしゃったように、川勝先生が平和ということがいかに戦後重要になってきたかということをおっしゃったように、それだけではだめです。きょうお話を伺っていて、その観点を踏まえて考えるならば、やはり外務省が今の中国に対して言っていることとちょっと違った意見を私なりに考える、その力をいただけたのではないかと思います。これは個人的な分野でありますけれども、本当にありがとうございました。

皆様もそれぞれきょうこのシンポジウムに出ておられ、ご自分の人生、ご自分が考えておられる危機感、きょう来ておられる若い方も含めまして、皆様それぞれにいろいろ考えるよすがをこのシンポ

ジウムで得ることができたら、主催者として望外の幸せでございます。

若干おくれましたけれども、これをもって京都産業大学世界問題研究所 50 周年のシンポジウムを終わりとさせていただきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

司会 フロアの皆様も本当に一緒にご参加いただきまして、ありがとうございました。

アンケートが同封されているかと思しますので、できましたらそちらのほうにご記入いただいて、入り口で回収していると思いますので、お返しく下さい。どうぞよろしく願いいたします。

本日は、本当に足をお運びいただきまして、ありがとうございました。

